

「どこツて的もないが、まア花のあるかぎり飄然茫然、ぶらくと行く心算さ」

「しかし貴方、どツかへ休みませうかね」

「さうだな、別に草臥もしないから休むにも及ばないが、はゝゝゝ、思召があれば御馳走し給へ」

「いたしますとも、失禮ながら御馳走しようと思つて、わざと混雑の中でお呼び申したんですよ、ねエ清」

「さうですとも、上田さんのこツてすから、どうせ飢饉年のお花見、定めし御空腹で在らツしやるだらうツて」

「こら下女また、怪しからん事をいふよ、苟も出がけに一升飯を喰つて来たから腹は便々だ、しかし酒なら少々かまはないぞ」

「あれ上田さん、そんな事を」

「何、かまふもんか、我琴を弾じ我笙を吹くだ、しかも其飯がね、出来損つて半粥と半焦の混合物で頗る閉口したよ、はゝゝゝ、ところで何處へ往くね、傳へ聞く水神の植半か八百松か」

「どこでも貴方の御隨意、早くまゐりませう」

「ぢやア少し急ぐが宜い、うるさい前の俗物は僕が蹴飛ばして行くから」

「あれ、亂暴をなすツちやア不可ませんよ」

「心配無用、唯そツと怪我のないやうに押し退けて通る意味だよ」

押し返すが如き群集を物ともせず、兩肩を恃て反身となつて足早に打通れば、いづれも驚き呆れて自然に片寄る中より、また酒の勇氣を藉つて梢の花もろとも喧嘩の花に誇らんとする曲物、上田が人一倍の大兵を面白き敵と見て、やい畜生め、ふざけた事をするなといはせも果てず、無言に其肩口ぐいと摺んで天生の大力に押し遣れば、手鞠

の如く蹴ね飛ばされて大地に伏し顛ぶを、見返りもせず悠々と行く背後には、川上の妻女とお清が頻りに氣を揉みつゝ、やうく梅若の社内に入るや否、額の汗を拭ひながら、ほつと息を吐きぬ、

「まア上田さん、酷い事をなさるよ、かはいさうに、今の人は怪我でもしては居りませうまいか」

「はゝゝゝゝ、あれが所謂の遊び人とか破落漢とか稱する奴で、よく人に喧嘩を吹っかけて何か自己の爲にする難物だから、わざと、してやツたのさ、時に梅若は此處だが」

「ぢやア植半へ這入りませう、しかし上田さん、定めし今日はお客も大勢でせうから貴方、柔順しくして下さいよ、もし間違ひでも出来ると女二人で困りますから」
「はゝゝゝゝ、よろしい、僕だつて其邊に如才は無いです、ところで馬鹿念を押すやう

ですか、財政は確乎ですか」

「ほゝゝゝゝ、それこそ御心配に及びません、何でも貴方お好み次第のものを澤山とりよせて、これで宜いと仰しやるまで召し上げよ」

「さうですか、しかし幾何ほど持つて居なさるね」

「あらまア、呵しいな事を、人が聞きますよ」

「だつて其邊を確めて置かないと聊か不安心だ、幾何です、いくら」

「ほゝゝゝゝ、二三十圓は御坐いますよ」

「二三十圓、そいつア確過ぎるほどだ、ぢやア安心して這入りますぜ、おいお清君、君よろしく萬事を處理し給へ、料理屋などへ這入つて奥様みづから馳走の注文や金錢の勘定をしちやア品位に關するからね」

「おや、おや、怖しいもんですワ、上田さんでも斯うなると、お世辭を知つて在らッ

しやるから」

「お世辭だ、馬鹿め、下女風情が知るところでない、黙ッてる」

前途見すの一文なしに飛び込んで百金の豪奢を恣にすべき容貌ながら、さて斯る事には小心翼々たる上田が天生、こゝに二三十圓と聞いて俄に肩を怒らせつゝ、おのれ眞先に植半の立關へ威張り込む背後より、水際たちし川上の妻女とお清、夫婦づれの下女附添とは盲目も見違はざる不權衡なれど、あまりの傲然たる體に書生とも思はれず、出迎への女中いづれも眉を蹙めて怪しみぬ、

樹立の隙間より隅田川を見渡す裏座敷の離れ家に、まづ上田が今日の上客として床の前に會釋もなき大胡坐、川上の妻女と清が其左右に並びぬ、

「さア上田さん、今日は貴方おもふ存分の御注文をなすつて、嫌といふほど召上つて下さい、私と清が御給仕を致しますから」

「や恐縮々々、ぢやア無遠慮に沈着いて遣ツつけますぜ、しかし今日は實に妙でしたよ、元來、僕は御承知の一癖もんで、白晝雑沓の花見などといふ事は別して大の禁物、これまで決して出た事のない男ですがね、今朝に限って何だか頻りに家外へ出たくなつて氣が向いたから、つい、うかくと遣つて來たんです、ところが豈圖らんとやで、つまり蟲が知らせたんですね、思ひも寄らず、唐突に斯んな御馳走たア、は、は、は、お清君どうだ、ちと面白い談話でもしないか、今日こそ獨得の下女辯を大に振つて饒舌るべしだぜ」

「おやまア御深切に大きなお世話さまです、しかし、ちよいと伺ひますが上田さん、全體、下女辯といふなア、どんな辯ですな」

「そウら來た、細君、どうです僕の顔さへ見ると直に斯うです、彼は」

「彼、よく貴方ア人の事を彼だの是だのと仰しやるが、私は清といふ名が御坐います

をりしも運び来りし料理の七分まで上田が注文の品々、會釋もなく自己が膝前に引き寄せて大盃をあけながら、

「や、うまいぞ、なか／＼飲めるわい、細君、一杯あけませうかね、お清君どうだ、遠慮するに及ばんぜ、どし／＼詰め込むが宜い、折角の馳走だ、肴は骨を舐ツて白く瘦せるまで酒は瓶子を倒にして、雫も餘さるの覺悟さ」

「あれ上田さん、澤山とりかへて御注文なさいよ、ねエ清」

「さうで御坐いますとも、第一お肴の骨まで嚙りついては外聞が悪い、少しは犬の喜ぶぐらゐに」

「こら下女、また餘計な事を吐す、そも／＼魚は肉よりも皮と骨とに味ひのあるものだ、酒は將に盡きんとする一刹那が甘露だ」

「おや／＼妙ですことね、なるほど皮に味はあるかも知れませんが、まさか骨に、上

田さん、骨は固くツて人間の食べるもんぢやア御坐いませんよ」

「食へる、固くない」

「ぢやア食べて御覽なさい」

「あれ清、およしよ、つまらない事を」

「だって貴方、あんな分らない強情をいふ人ですから、骨の食べ工合を拜見いたしますの、これこそ淺草の公園でも見られない藝ですよ、ほ／＼／＼」

「や此女め、いよく向ツて來るな、よし、ぢやア骨の食ひ鹽梅を見せてやる、謹んで見物しろ」

いふや否、鯛の焼物皿を取上げて兩眼くわツと見開きながら、むしやく／＼と肉を喰ひし後、ぱり／＼と其骨を音高く嚙み出せば、さすがの二女アツと呆れて思はず顔を見合はせぬ、

「は、は、は、なるほど、あんまり甘くないもんだね、實は骨の附際にある味といふべきところを、あやまって唯だ骨と言ったのさ、しかし下女風情に言ひ込められて謝るのも残念だから我慢して嚙りついたもの、いや固かったよ、まして鯛の骨といふ奴はね、おや、咽喉が變だぜ、妙な心持がするぞ、はてな、む、ウ、えへんくこいつア少々まるった」

「それ御覽なさい、だから、およしなさいと申しましたに、第一お清が悪いよ、つまらない事を、もし小骨でも咽喉へ引ツか、ツて居るのぢやア御坐いませんか」

「いえ妾も悪いが上田さんもまた無法な方ですよ、骨が食へる固くないなんて、しかし眞實どうかなさいましたの、もし小骨なら貴方、御飯の小塊を丸呑にして御覽なさい、お脊中でも叩きませうか、お湯か水でも」

「いや大丈夫、別條はない、が、ちと呵しいよ、えへんく、あツぷく」

入相の鐘に花よりも人まづ散り失せて、さしも雑沓せし向島の土堤に人影ちらほら、春の生命ともいふべき此夕暮の景色を打捨て、あれほどの人浪うちし馬鹿もの奴いづこへ消えて無くなりしぞ、いよく俗物の本體を現しけりと上田先生こゝに陶然として二女を伴ひつゝ、梅若を立出でて白髯の社頭まで来りし折しも、葭簀張の懸茶屋に残りし三四人の客に對うて軒に立ちながらの古三味線、編笠ふかく面を包めど唄ふ聲の調子といひ、すつと立ちし後姿の柳腰、どこやらに目標ある筈と見れば、結べる帯の端に豫て覺えの模様、さては正しく其女、嗚呼まだ斯る業をしをるか、させをるか、おもはず涙ぐんで足を停むれば、お清それとも知らず袖を曳いて、

「上田さん、御酒の機嫌で浮かれては困りますよ、第一が唄なんぞ聴く柄ですか貴方は、さア早く歸りませう」

「いや、ちよいと待ッてくれ、あの女、いかにも哀れだ」

「おや、おや、妙な事を仰しやるッ」

「だッて可愛さうぢやアないか、一年一度の人が樂しむ春の花を其身が露命の種として、あゝ唄ひたくもあるまい、時に妻君、金を五圓ばかり下さらないか、あの、あの女に遣りたいンです」

「五圓、いえさ、お金は五圓でも十圓でも此處にあるだけ差上げますがね、何も貴方、あんな女に五圓も」

「そりやアさうですがね、あれも貴方も、同じこッてすよ、身分こそ違へ、もし良人を持ッて居るとして見れば、ね、たゞ貴方は幸ひにして紳士の家に生れ俊秀の才士を良人に持ちしがため、あれなンざア貧家に生れて厄介な男を持ッてる女でせうさ、可哀さうに、下さい、僕に下さい、彼女に遣ると思やア何だか酔狂のやうです

が、僕に、上田力に下されば貴方、さのみ腹も立ちますまい、おいこら下女、何だ傍から呵しな目を剥き出しやアがッて、控へろ、黙ッて引ッ込め、其面を」

強ひて奪ふが如く五圓紙幣一枚を貰ひながら、驚き怪しむ二女に目もくれず、袂より皺くちやの反故を取出して小さく包みつゝ、そツと立寄りて今しも弾ける三味線の駒に挿めば、音じめ忽ち狂うて驚く編笠、さらぬも花の下の夕暮、たしかに此方を見るの違なく身を翻して遁ぐるが如く走せ戻りながら、

「さア歸らう、ちと足早に歸りませう」

其四

本所の奥の龜井戸村に水香百姓の住み荒せし家を借り受けて、浮世を忍ぶ涙の宿としながら死しても忘れ難き友情の百金はあれども、これぞ良人の疾病を養ふべき醫藥

恥も絲瓜も構はない氣になつてさ、それも大恩のお金を一文でも外の事に費ツちやア、實に濟まないといふ心からですがねエ」

「む、さうかい、や、さても儲も何の因縁あつて我々夫婦は斯くまで上田一人を苦しめるンだらう、世の中も廣し人も多いにねエ」

「しかし良人、今日、上田さんは不思議でしたよ」

「何故、どうして」

「何故ツて良人、あの上田さんがね、立派な奥さんと下女を連れて、しかも微醉機嫌ですの、自分の服装こそ例の通り萬事うちやりの構はず屋ですが」

「上田が、妻と下女を、あの上田が、連れて居たア」

「それがさ、その奥さんがね、容色といひ姿といひ衣裳といひ、あんまり立派に揃ひ過ぎて居ますから、はてな、他人かとも思ひましたがね、そつと後から見え隠れに

付いて様子を窺ひますと、なか／＼他人行儀では無いの、御自分が眞先に立ツて例の肩で風を切る勢ひの後から、さも馴れ／＼しう娛樂さうに、くつついてね、何か頻りに嬉しさうな笑談の工合、下女も良人、きのふ今日の召使ぢやア無いやうですよ」

「や、そいつア驚いた、殆ど神武以來の椿事と謂ツても宜いくらゐることつた、して和女、どういふ工合で上田に逢ツた」

「それがね、白髯の掛茶屋で、彈いて居ましたの、すると背後から不意に三味線の駒へ紙屑の捻ツたのを挿んだ人があつて音じめの狂ふ途端、はツと思つて笠越しに見ましたが、夕暮の軒端でもあるし、また其まゝ直ぐ遁け出したやうですから、しツかり分りませんが、思はず振り返つた時、あの人並すぐれた大きい身體ですもの、一目に其人と知ツた折の面目なさ、實に穴へ這入りたいやうでしたよ、よくあるこ

ツて花見客の悪戯かと思つた紙屑も、上田さんと知つた以上は其まゝ押戴いて帶の間に挿み、駈け出しながらも櫻の根を小盾に取つて見送ると、今いうた通りですのお言葉を掛けるにも掛けられず、さりとて淺ましい此ざまを見て、嗚呼まだ斯な事をして居るか、馬鹿はいつまでも馬鹿だと思はれはしないかと、恥づかしくツて口惜しくツて良人、編笠の中で思ひ切り泣きましたよ」

「む、ウ、もう乃公も言葉がない、たゞ和女に對して、いかにも氣の毒だ」

「え、またそんな事は、どうしても宜いが、あとで紙屑の中を見ますとね良人、五圓紙幣が一枚」

「して和女、その紙屑は、どうした」

「こゝに持つて居りますよ、どうせ上田さんが書き捨ての反故に相違ないから、これも我々夫婦がために恩人の記念、ながく大事に仕舞つて置きたいと思つて」

「そりやアよく氣がついた、さうなくツちやならないところだ、しかし、ちよいと其

反故を見せな、何が書いてあるか」

反故を廣げ皺を伸べて燈火の下に見れば、徒然の何心なき筆の跡、一枚の半紙を縦横無盡の墨まツくろになるまで、さらに際立ちたる文字なく讀み難けれど、筆勢の餘りし紙の端に黒田健次といふ四字あり、はツと思つて猶よく見れば、また其傍らに可憐の妻とありて、慘澹、悲哀、病苦、痛傷、扶助の途などの文字おのづから聯りたれば

流石の健次おもはず身を震はして涙を含みぬ、

嗚呼この反故これを我に送り我に見せんとての業ならず、唯たま〜其袂より探り出せしものならんに、いたづらの徒然書にさへ斯くまで我を思ひ妻を憐れむの文字、おのづから其眞情の溢れ出でしかと、俄に容を改めて膝前に差置きながら、

「今、和女の談話で見ると、かの七十圓といひ小袖といひ三度目の百圓も、なるほど

他人に頼らずして送れる筈だ、ついでには例の探偵一件も、いよく物の間違ひといふ事が分つて安堵したよ、しかし上田が、そんな妻を持って、下女を連れて、悠々と花見に出掛けるほどになるたア、夢にも思はれない、奇だ、怪だ、どうも不思議だとはいふもんの、奇怪ふしぎと思ふのが即ち乃公の過誤で、多年の間、與みし易き愚直一片の人物と輕んじた彼は寧ろ我よりも俊秀の才機で、また茫とした何事にも關せざるか如き裡に、おのづから浮世に對する腕まで遙に勝つて居たのだらう、嗚呼それにつけても和女には實に濟まないこつた、曾ては同じ一つ鍋のものを喰ひ合つた友達同士が、結句の智愚と成敗を倒まにして、我こゝに過分の妻を持ちながら其妻に袖乞の古三味線を弾かせて露命を繋ぐ淺ましき、それに引替へて彼は三春の行樂を追ひながら其妻を飾り其妻を慰めて、しかも同じ土地の同じ花の下で、恩を送る境遇と恩を受けて恥づかしさに泣く境遇、いやもう何とも言句なしだ、なまなか

病氣の善くなるのも却つて苦痛を増すの基だ、ねエお島、なぜ和女は斯んな不幸な男を持つたんだよ」

「ほ、ほ、ほまた始つたよ、良人にも似合はない愚痴が、よし眞實あれが上田さんの奥さんにしたところが、なんですよう意氣地のない、人間は七顛び八起きといふ世諺があるぢやアありませんか、しツかりなさいよ、馬鹿々々しい、どうかすると直ぐ此ごろは、お泣きなさるんだよ、病氣の故かも知れないが」

「泣くさ、これが和女、笑つて居られるもんかね」

「泣蟲、男らしいもない、泣いて事が濟むなら、妾こそ今まで出した涙で立派な庫が立ちますよ、傾城の何とやらぢやアないが」

「あ、黒田健次の死せざるは妻あるが故だ、我々夫婦の未だ世に存するは上田力あるがためだ、この妻と、この友と」

「この妻と、この友よりも、この病と此家を早く忘れる工夫が肝要ですよ」

「よし、心得た、上田にして猶かつ聞くが如き境遇ありとせばだ、我こゝに衰へたりと雖も、むゝウ」

「それく、その呻り聲が男の舞臺ですよ、もつと良人しツかり呻ッて下さいよ」

「はゝゝゝ、病中あんまり呻ると、まだ少々苦しいよ」

「ほゝゝゝさうでしたね、ぢやア妾が代理に呻りませうか、それ、お聴きなさいよ、むゝウ、むゝウ、おゝ苦しい」

其五

日は花に没し人は家に歸りし黄昏時、向島の小梅橋より車に乗らんとせし二女を吐しながら、愚な事をいふべからず花見の歸途に車とは鰻を食ひ飽きた後で天ぶらの山盛

と一般、俗中の俗なるものだ、まして食後の満腹を奈何せん、いざ勇を鼓して歩むべし歩むべしと、上田みづから先登に立ち、疲れ果てたる二女を伴うて河岸傳ひに兩國橋を渡り、やがて濱町の富田家に歸りし頃は夜の九時を過ぎぬ、

「あれ上田さん、まア貴方お這入りなさいましよ」

「いや、こゝまで送り届けたから僕の役目は済んだ、もう安心した、川上に宜しう」

「だッて折角、是非お上り遊ばせよ、今から貴方お歸りなすッたッて、お一人で別に仕方は御坐いますまい」

「親兄弟あるでなし妻子眷族あるでなし、將また我を待つ友なく貯蓄の財なく珍器なく常食なく、茶なし菓子なし心配なし、あるものは米が四升あまりと鹽が三四合に醬油が一合半、金山寺味噌が價六錢分、前夜の乾魚は鼠に仕てやられたかも知れず聊かホヤに異状のある豆ランプと脚の曲ツた机一脚、襟垢のついた木綿夜具が上下

一枚、枕一個、マツチ三四個、茶碗箸皿小鉢の類が一人前やうやく、口の缺けた土瓶と手の取れた土鍋の杉板の箱火鉢と、まてくまだある筈だ、おツと忘れた横町の湯札が六枚ばかり」

「おやまア大變な御身代ですな、しかし階下に宿の夫婦が居るといふこつですから、まさか盜賊の御心配も御坐いますまい、ねエ清」

「ほ、ほ、ほ、盜賊が先方で用心いたしますよ、誰かに聞いた談話ですが、上田さんのやうな方の住家へ盜賊が這入ったと思召せ、すると家内中を掻き探したって何も取るものが御坐いますまい、そこで盜賊が寝て居る主人を揺り起しながら、おいしくちったア恥を知れと言つて出て行きましたさうで」

「こら家鴨、また乃公を輕んじ居る、しかし面白い談話だ、なるほど、人間も盜賊に恥を知れといはれるやうになつちやア聊か心細いね、殆ど滑稽だ、は、は、は、は、」

奥までも響き渡る玄關前の高笑ひは、正しく其人と知つて川上みづから出で來りしかば、今更ら歸つて用なき身の我家も同然の心地して、さらば酔醒の水でも茶でも賜ふべしと、上田先生またこゝに臀を落ち付けぬ、

「やア川上、君に感謝する、今日はね、ふと氣が進んで向島の花見と出掛けたのさ、すると思はず細君に出逢つたから、つい一言二言の果が御馳走となつて、植半の料理した、かの満腹、實に近來の快だった」

「そりやア雙方よかつた、しかし、わざく送つてくれて恐縮だね、どうだ、飲み直しでもするかね」

「いや、もう飲めない、飲めば飲めるがね、此上に飲んぢやア却つて興を損じ快を破るの基因だ、は、は、は、もし更に御意あらば寧ろ茶菓の饗應にあづかりたい、人體にない事をいふやうだが、雨後の明月と一般、酒後の甘味といふもなアまた格別だ」

ぜ」

「は、は、は、お易いこつた、おい誰か菓子を持つて来い、羊羹が宜からう」

「羊羹々々、羊羹に限る、そいつアますく妙だ」

「雨風の大關、流石は體格だけのことあつて、いつもながら相變らず壯だな、時に今日、向島の花見で全體どんな感があつたね、君のこつたから定めし議論があるだらう、何か一種の感が浮んだらう」

「ある、大にある、なかく大した議論もあつたがね、不意に植半の料理を詰め込んで腹の蟲を驚かした故か、忘れて仕舞つたよ、は、は、は、なアに花も人も年々歳々同じこつて、別段これといふ變つた事もないがね、たゞ一事、變つたやうに思つたのは君、見渡すかぎりの人の山が面積に於て廣くなつて居ながら高さは寧ろ俄に低くなつたやうだ、まづ汐入村以來こゝに殆ど七年、その以前が五年、この東京に來

てから十二年の間、年々一度も缺かさず向島へ出かけて見るがね、今日は一人も僕より脊の高い奴がなかつたよ、つまり僕その者が年と共に脊の伸びたからだといふだらうが、決して然らず、體量こそ年々に増えたが脊は十年以來こゝに依然たる五尺八寸で、その十年以來の花見毎に向島の雑沓中を歩いて見るに、随分中には僕よりも高い奴もあり、また僕と匹敵する奴も多いし、およそ一町を歩む間の平均數僕に過ぎた奴が先づ一人、僕と甲乙ない奴が三人の割合で、僕の目から耳、鼻から口にかけて願ぐらるまでの奴が二三十人もあつたらう、それがね、年々に少くなつて一昨年の如きは殆ど豫期の半に減じ、去年は三分一内外、今年の今日は墨堤十里の間さらに一人の及ぶものなく、いづれも肩から以下のチビ助ばかりさ、そのくせどうかといやア人の數が寧ろ年々に多くなつて、今日なンざア歩を運ばなくつても前後左右から自然の動力に押されて進むほどの混雑で、人の山が平つたく廣くなつ

ただけ高さが低くなつたと思ふのさ、ね君、と斯うばかりぢやア實に馬鹿氣きつた議論だが、さて沈思黙考、さらに考一考すれば其間に於て恐るべき一の社會的人生觀が浮ぶね、しかも脊の寸尺ばかりでない、日夜しきりに衛生々と叫んで至るところ運動體育の大騒ぎ、其上また滋養物々々と喚きながら、體量體格の打算上すべて人間が反比例の結果で、細く青く軽く小さく骨ッほくなつて來たやうだぜ、嗚呼これ果して何の現象ぞやだ、大男總身に智慧が廻りかね、小男はあるだけあつても知れたものといふ世諺は儲置いて、別に原因の存するところ機微の伏するところ、かの平凡醫者の乾燥論や模型學者の統計論を外にして、大に攻究すべき價値があるだらうと考へる、そこで僕は僕の腦裡より一週間を期して其原因結果を生み出す覺悟だ、まづ今日の花見に依つて得たる利益は植半の料理と此問題とだ、は、は、は、つまらない事を饒舌つて咽喉が乾いた、茶、茶、湯でもよし、なみくくと大きな器

に「ばい頼む」

川上おもはず膝を打ちぬ、その議論に感じて膝を打ちしにあらねど、のツそりとして愚なるが如く茫然として癡なるが如き上田が、偏見なれど常に事々物々一種の主義と持論を構へて叩けば叩くほど音のする爲人に感じつゝ、かねて思ひし幸ひの時なり、この機に乗じて試みんと笑を含みながら、上田が面體じつと見詰めて、

「なるほど、そりやア面白い議論だね、實に感心するよ、いつ不意に問うても君は必ず何か議論を持つてるから、時に上田、僕がね、あらためて君に進める事がある、どうだ、いつまで獨身で居らるゝもんぢやアなし、妻帯しては」

「妻帯、僕に妻を持つてといふんか」

「さうだ男に對する女、人倫の第一だ」

「は、は、は、止せよ、過日も黒田が妻の事に就いて、ちよいと漏らした通り、僕ア無

妻主義だよ」

「いや、あの時の議論は承知してるがね、まづこゝに君をして更に心を勞せしめざる妻があつて、つまり女の君ともいふべきものがあつてさ、眞の伉儷、有形無形ともに寸分の過不及なき妻があつたら、どうする、君だつて殊更に好んで無妻主義を張るンぢやアなからう、ある點から感ずるところあるがため強ひて自己を枉けた議論だらう」

「は、は、は、は、は、は、むづかしく打ち込んで来たね、細説は兎も角、第一どうして其妻を喰はせるね、僕が境遇で」

「そこだ、そこだよ、樂しむべく愛すべく互に扶け合ふべき妻が却つて悲しむべく歎くべく果は怨み合ふべき結果となつて、むしろ獨身の昔を慕ひ妻帯の後を悔うるものは世の中に多いがね、それやア悉く性格と資格の相反するが故で、始めから伉儷

といふことを誤つてるからだ、すでに伉儷といひ夫婦といふ、その間に何の不愉快あるべき筈なく何の不吉あるべき道理がないよ、もし人間一般に苦痛なるものありとせば、夫婦相倚る時よりも獨身無援の時こそ寧ろ苦痛の多かるべき筈だ、ね、そこで僕が君に勧めるのは、もし君をして無妻主義を抛だしむるに足るべき女があれば妻に持つか、いや必ず持つだらうといふのさ、どうして其妻を喰はせるナンざア君にも似合はない俗論だ、ぢやアどうして君が生きて居るといはなきやアならン、結局そんな枝葉に互つた机上論は儲置いて、實際どうだね、こりやア僕が及ばずながら友誼上、君の生涯に對し謹んで言ふのだ、敢て一場の理窟を並べるンぢやアないよ」

「や、わかつた」

「わかつたといふのは持つといふことか」

「なるほど持つ、持つよ、持つがね、そもくその妻いづくにある」

「は、は、は、は、例の無妻主義を打破して、持つといふ事さへ聞けば、それで宜いんだ、僕また別に考へるところがあるから」

「しかし川上、上田力が持つべき妻だよ、當世に得たる才なく身を養ふべき力なく家なく地位なく、一切すべて斯の如き僕に相應の妻だよ」

「よろしい、萬事心得た、多言に及ばず」

「だつて君、さう獨り極めに極めて仕舞ツちやア困るよ、むやみに遣ツつけられちやア閉口するぜ、唐突の押附業なンざア斷じて承知しないぞ、なかく僕を無妻主義を破るに足るべきほどの滑稽じみた馬鹿な女はないからね、もしあれば先方で僕のやうな男を持つもんか、無効だよ」

「無効でも何でも宜い、いよく妻帯すると言つた今の一言が何よりだ、大丈夫、き

ツと探し出して見せる」

「しまった、早く歸れば宜かつたに、妙な工合で變な事になつたわい」

「なに、何が妙なもんか、男として妻を持つのが何故、變だ」

「もう僕ア歸る」

「あ、歸つても宜い、今の一言たしかに聞いた以上は」

「いよく不可ない、どうも甚だ宜しくない、殆ど困つたな」

「は、は、は、は、お清でも呼んで助太刀させようかね」

「いやはや、どうしてこんなところへ彼女に出られて堪るもんか、それこそ失敗また失敗、うかくくすると勢ひに乗じて僕の獅子鼻へ嚙りつくかも知れないよ、は、は、は、は、」

「しかし君、彼女は妙な女だぜ、君に對ツちやア目の敵のやうに咬み付くがね、陰ぢ

やア君の爲人に心服して神の如く思ッてるよ、上田さんのやうな立派な氣心を持つてる方は千人萬人の中に一人もあるまいッて」

「馬鹿め、何を吐すか、生意氣に人の批評をするなんて、は、は、は、どりや歸らう、歸ッて直ぐ寐るだ」

「歸ッて直ぐ寝るにしても君、もしこゝに君を待つ妻なるものがありと假定せよ」

「は、は、は、今夜ア嫌に僕を酷めるな、自分の妻が強制執行で植半の奢をさせられた敵討かね」

「や、出來た、こりやア君にして大出來だ」

「え、何とでも言へ、は、は、は」

其六

しめやかなる春の夜ふけて、音なき庭の樹立の奥ふかき一室に、川上の妻女みづから茶菓を進めながら、例の下女お清に對うて何とやら改まりたる言葉の端々、燈火の外に見るものなく聞くものなし、

「ねエ清、和女が當家へ來てから、もう八年になるよ、其間これといふ目に立ッた恩も世話もしないに、和女の方からは萬事の深切、陰陽なしに勤めてくれたのみか、第一この妾を身に替へて、女親が無いからッて一入の面倒を見てくれたことは、しみぐく忘れないよ」

「あらまア何で御坐いますねエ、今更、そんな事を仰しやッてさ、妾こそ不束な生來で何一事これといふ御奉公甲斐のないものを、永年の間、御辛抱くださいまして」

「いえくさうでないよ、これまで和女の眞實は全く嬉しう思ッてるよ、ついては妾も斯うして、ともかく良人を持ッたから、和女もねエ、どうせ、いつまで其まゝで

居られるもンぢやアなし、同じ事なら妾等夫婦の目に叶った人を見立て、及ばずながら萬事の用意もしてさ、姉妹分といふことだね」

「あれ、勿體ない、まア何を仰しやいますンです、奉公人の妾を、姉妹分だなどといえもう御覽の通りのもんで御坐いますから、割れ鍋に閉ぢ蓋で、そのうち何處ぞへ勝手に顛け込みますまで、まだこゝ三四年は此まゝ御傍で」

「そりやア此方から頼ンでも居て欲しいがね、さて女といふものは誰しも嫁期があつて、さうもならないし、また和女ほど長らく神妙に勤めてくれた女を、妾等夫婦が自分の勝手ばかり考へて、いつまで捨て置いては世間へ對しても濟まないから、是非とも今のうちにね、しかも少々その心配があるんだよ、良人とも相談して置いた人が」

「おや、それほどまで、この清を、何とも御禮の申し上げやうが御坐いませンこつて

あつく、うけますが」

「厚く受けるなら、和女、承知だね、勿論まだ先方の人に打明けて確かめたといふぢやアないがね、まづ妾等夫婦が心から取持てば、大抵、縁談が纏まるだらうと思ふ人だよ、だから和女の方を兎も角、きめて置きたいの、つまり妾は和女の掛りで、良人は先方の掛りと、かう極めて手分をしてるんだからね」

「いえもう、妾は斯な不容貌で馬鹿で、どこに一事の女らしい取得のないもんで御坐いますから、貰ツてやるとさへいふ方なら、まして其上に御主人の御世話で、お鑑定までして戴いた以上は」

「ぢやアいよく承知しておくれだね、やれよくそれで安心した、和女の身が片付けば妾の義理も一事は濟んだといふもんだよ、大丈夫、きつと和女の氣にも入り爲にもなる人だからね、心配せずに妾等夫婦へ任して置くが宜い、しかし、縁といふも

のは、いくら傍側から氣を揉んでも、つまり本人同士の心と心とが自然に合ッて出来るもんだから、もし萬々一、和女が嫌と思ツたら、遠慮なしに言ふが宜いよ、先方だッて其通り、一生涯に一度の大事なこッたもの、どんな都合で斷るかも知れないから、もしさうなれば、また別に見立て、和女の身の事は、どこまでも妾等夫婦で受持つ決心だよ、今、心當りの人と目出たく極ツた上は、良人とも相談して家の事から世帯道具に至るまで一切すべて引き受ける覺悟だよ、そして以後は親類同様、いく久しく世話もするし、また世話にもならうし、ねエ清、お互に楽しく暮さうぢやアないか」

いひつゝ、其顔を見れば、お清いつしか兩眼に涙を含んで、果は袖に面を包みながら、おいくと泣き出しぬ、

「あゝ有難う、御坐います、この御恩は、死んでも」

こゝに奉公してより八年以來、いかなる事にも屈託せずして、日夜しきりに笑ひつゝけしお清も、今は嬉しさに餘ッて其まゝ泣き伏しぬ、

お清やうく嬉し涙を拭ひながら、進まむとする膝を兩手に押し静めつゝ、いかにも恩に感じて染々と身に徹へたる體、聲まで平生の調子と變りて、

「もう妾は、何にも申し上げません、却ッて恐れ入りますから、たゞ何分にも、よろしう」

「宜いとも、宜いよ、しかし、人の生涯が一夜で極るほどの大切な事を、妾等夫婦が心の勝手で承知して居ても濟まないし、また和女にも和女の勘考があるだらうから、ねエ清、ちよいと試みに先方を當て、御覽、どうせ當家へ来る人で、よく和女も知ッてる人だよ」

「どう致しまして、妾に勘考などが御坐いますものか」

「いえくさうでない、まさか不意に押し付けられるもぢやアなし、いづれ斯人だと打明して和女の返答を聞く筈だから、かまはずに言ッて御覽よ、外に誰が聞いてるでなし、妾と和女の間だもの、和女だッて、最初、良人の事に就いて妾に、いろんな事を言ッてさ、さんざ困らせたぢやアないか、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」

「あらまア、際どいところで敵討を遊ばすよ、しかし妾には、どうしても見當が付きません、お出入の中で肴屋も八百屋も米屋酒屋その外、どこにも、差當ッて獨身が御坐いませんもの」

「あれ清、和女、そんなものだと思ッてるの」

「だッて妾が妾ですもの」

「さう、それぢやア和女、よほど見當が違ッてるよ、實はね良人のお友達で」

「ほ、ほ、ほ、御戯談を、まアお人の悪いこと」

「いえ眞實だよ」

「いくら何でも、そんな筈が御坐いますものか、ものには身分相應の權衡が」

「いえく眞實だよ、ぢやア打明けて、いふがね、あの、そら、上田さんね」

「きくや否、お清おもはず目を丸くして、俄に總身へ電氣を感じしが如く、一種ふしぎの顔色を現しぬ、

「おや、清、嫌なの、不承知かね」

問へども更に無言、暫時は目を閉ぢ目を開き口を曲け耳を赤くして、何をか思案に沈める體、

「もし不承知なら、今のうちに清、妾へ、そツと言ふが宜い、何も無理に勧める譯ぢやア無いから」

そのまゝ、じツと打守れば、やがて我に返りしが如く、されど差俯いたるまゝ、膝を組み

直し聲を潜めて、

「無効で御坐いませう」

「何故、なぜ無効だよ、迎も無効といふ事が、どうして和女に分るの」

「いえ、別段、妾に分るといふことも御坐いませんが、あの上田さんは、なかく世間普通の方ぢやア御坐いませんもの、まして妾のやうな女を、迎も無効、夢にも貰つて下さいますものか、上田さんなら、どうか、仰しやらずに此ま、取消して戴きたう御坐います」

「ほ、ほ、ほなるほど、さう思ふのも無理はないがね、たしかに上田さんが承知なさるといふ證據、いはゞ其手應へがあるんだよ、上田さんが世間普通の人でない事もまた假令どんな美人でも賢女でも、容易に貰はないといふ事は妾等夫婦が百も二百も合點の上で、たしかに和女なら縁談の纏るといふ呼吸が別にあるんだよ、それと

も和女の方で嫌なら、どうも仕方がないがね」

「へエ、いかにも不思議で御坐いますね」

「今更ら和女、そんな事をいはずに、確乎した返答おしよ、いやか、應か」

「どうしても妾には、眞實のやうに思へませんから」

「ぢやア嫌なんだね」

「ど、どう致しまして勿體ない、唯あんまり身分に過ぎますから」

「縁だよ、そこが清、縁といふもんだよ」

「しかし、今のうち、申し上げて置きますが、もし萬々一、いえ萬々一ぢやアない、當然のこつて、どうせ上田さんが、え、穢らはしい下女風情、まして彼女がと、御立腹なさいましたら、其日から直ぐ妾は、お暇を戴きたう御坐います、あの方のこつてすから何處でも構はず、やいこの家鴨の罰あたり女、よくまア恐れ氣もな

く、づうくしい乃公の鼻アになりたいなどと、怪しからん女だ、踏み殺して仕舞ふぐらゐのことは、きつと仰しやるに違ひ御坐いませんから」

「ほゝゝゝもし萬々一、そんな事があったって負けて居る和女ではあるまいぢやアないか、平生から上田さんに對つての手並は」

「だつて外の事と違ひますから、いくら妾でも居たゝまりませんもの」

「ところが清、和女まだ眞實に上田さんを知らないね、なるほど、毒にも罪にもならない事には人中も構はず無遠慮な方だがね、かりそめにも人間一生の身に關したり名譽に關したり、また情愛などの事になると、人に恥を與へるところか、同情の感に打たれて男泣きに泣くほどの眞實ある方だよ、萬々一、この縁談が出来ないにしても、和女の情を身に浴びて生涯の間、その御心に感謝なさる方だよ、もしあゝいふ方を和女の良人に持てば、たとひ其日の衣食住に事を缺くとも、萬金の家へ嫁入

したより遙に勝つた女の幸福だよ」

其七

およそ世の中に男女の縁ほど不可思議なるものはなし、男は持たで叶はぬ女を求め、女は持たで叶はぬ男を求め、その男こゝに良人となり其女こゝに妻となり、互に相倚り相扶けて夫婦一家をなすの體、宛ら風に吹かれて彼方より散り來る木葉と此方より散り行く木葉と相重り相合ふが如く易けれど、また難しといへば千軍萬馬の力をあつめて攻むるとも更に何の甲斐なきほど難きもの、人生の喜怒哀樂これより生じて一夜の情契は百年の利害得失に及ぼし、かりそめの媒妁口その間に誤つて忽ち一家一門の紛亂争鬭となるの類例、さては妻あるがため良人おもはず人知れぬ男泣きに咽び、良人あるがための妻いつしか瘦せ衰へて涙の淵に沈みつゝ、過ぎし昔の花と花とが春の

心地に擁せしものも、果は生きたる屍と屍とが冷かなる秋の風に睨み合うて、こゝに浮世の悲痛慘澹を極むるも亦この男女の縁なり、

縁といふ一字、これを論ずれば古今東西の智者學者が腦を碎いて萬卷の書を著すとも竟に難く、縁といふ一事、これを見れば自己が年齢を數へ得ざる愚者文盲も教を待たずして行ふこと易く、しかも金殿玉樓に相並んで悲しむものあり、破屋陋巷に相擁して樂しむものあり、萬人傑出の名士も其選を過つて歎ずるは縁なり、淑徳善良の賢女も其選を誤つて泣くは縁なり、さりとして奸惡無頼の徒に貞婦あり、白癡汚醜の奴に美妻あり、求めて得べからず、得て安んずべからず、安んじて悔い、悔いて改めんとするも遅く、哀樂の曲折、歡苦の轉々、たゞこれ不可思議といふの外なし、されど男女の縁なくして人いづれか此世にあるべき、愛すべきも縁、恐るべきも縁、喜ぶべく悲しむべく歎ずべく慶すべく怒るべく樂しむべく、人事百般の禍福吉凶これ

より生ぜざるはなく、縁なるかな、縁なるかな、縁は人間を支配する運命の神なりとは、例の上田力が平生の論鋒なりける、

多年この論鋒を持して磐石の如く兩肩を怒らせし上田先生も、あはれ竟に叶はざりけん、またいつしか縁といふ魔力の下に支配せられて、彼お清を妻と呼びつゝ、自己あらたに良人の名稱を受けんとす、嗚呼この可憐漢が縁より生み出さるゝ將來の禍福は奈何、

あくまで無妻主義を張り抜いて大地に根を持つが如く動かざりし上田に對うては、川上が三日三夜の間こゝに力を極めて竟に説き伏せ、お清は妻女が一言の下に何として違背あるべきぞ、おいゝ泣いて喜ぶほどの縁談、いよゝゝ吉辰良日を選びて友白髮までの祝杯をあけんとぞなりぬ、

乃公こゝに知己の扶助を得て僅に斯の如し、豈それ小面倒なる嗚アを待つての違あらんやと、四角ばつて目を剥き出せし上田を前後左右より和らけたる川上が手柄顔、ほつと溜息ついて先づ倉橋が許に断け付け、大願成就、委細これくと語れば、さすがの倉橋も満面に笑を含んで目鼻を一時に取崩しつゝ、さアえらごちや、用意々々かうしては居られぬと飛び上つて走せ廻りつゝ、さながら貧乏世帯の不意に節期師走の押し寄せたるが如し、

上田が萬事の後見は川上の役目、お清が一切の引受は妻女の役目、夫婦こゝに一所懸命となつて殆ど狂するばかりに立騒ぎつゝ、果は意見の衝突より騎虎の勢ひに乗じて競争せんとするほどなりしかば、さしづめ媒介役の倉橋が其間に挟まれて調和奔走、どつちに附いて宜いやら、あゝ苦しい苦しいと狼狽しながら顛け歩いて吹き出しぬ、寒からず暑からず、けに今が四季の最上、人間こゝに情致の好期、春と夏と行かふ空

の通路は、かたへ涼しき風や吹くらん五月の三日いよく其日とぞ定まりぬ、

いはゆる浮世の才子より見れば事に疎く時を知らざるの愚、いはゆる術数の策士より見れば殆ど齒牙にかくべからざるの癡、富貴の目には乞食に等しく、権門の目には瓦礫に等しく、美人は怖れ老幼は駭き、頑たる硬直おのづから世俗に容れられず、寂たる孤立いたづらに市井の嘲弄を招いて、生來こゝに二十八年の間、いまだ曾て自己を枉げ人に屈せざりし一癖一流の上田力が、五尺八寸二十貫目の大兵に生涯一度の恥づかしさを忍びながら、香爐獅子に似たる鼻を白め鷹の如き目を細めつゝ、破鐘を撞くが如き聲を潜めて新枕に就くの状いかならん、鳥羽僧正の名畫も及ばぬ奇とやいふべき、こゝにまたお清は其姿こそ家鴨に似たれど心は鶴に等しき女、顔面ほつと真正面、南風に逢うたる餉細工の如く膨れながら、どこやらに得もいはれぬ無量の愛敬を含んで、

をり、自然の滑稽に罪も報いもなき體、さりとして幼少より父母を失ひ同胞もなき他人の手鹽にかゝりて、いつしか浮世に馴れたる世話娘、そのまゝこゝに世話女房となつて男も男、上田が如き男に生涯の契りを籠めて百年の苦樂を共にせんとは、家庫引き廻して年中常綺羅の日髪日化粧に暮さんよりは遙に勝りし幸福女、當年こゝに二十六歳の處女、これをも苔の花とやいふべき、

互に身には斯る運命ありと知らねど、縁を結ぶの神は早くも笑を含んで戯れけん、汐入村以來こゝに七年の間、顔さへ見れば口を尖らし泡を吹いて諍ひながら、あとは其まゝ毒も怨恨も残らず消え果て、何とやら憎からぬ年來の心と心、これが上田とお清なればこそ、其身も知らずで打過ぎ人目の關にも戀とはならで打過ぎしが、今こゝに夫婦となりて思へば何とやら流石に恥づかしき心地やせん、

其八

世間の義理、人間の義務、生涯のうち一度なりとも夫婦の媒せずば死して地獄へ行くとこの諺を思へば、夫婦も夫婦、上田の如き男とお清の如き女を取持ち、しかも新に一家の肝煎より世帯道具の末に至るまで引き受けし我々は、死して極樂の中央へ大手うちふつて通るべき筈と、川上倉橋もろとも互に手を拍つて打笑ひぬ、

「しかし川上、今更ら變な事をいふやうだが、あの上田にして、よくまア承知したこつたね、無論、君が説伏の功こゝに與つて大に力ありだがね、彼が天性から割り出して見ると實に奇だ、殆ど妙だね、結果こればかりは古今を通じて人爲の外といふべしだな」

「いや、なか／＼容易に承知しなかつたさ、尋常一般の議論的勧誘では逆も無効だが

ね、いつか向島の花見から僕の妻を送つて来た時、ちよいと伏線を設けて置いて、爾來しきりに策をめぐらし機を窺ひ、こゝぞと思ふ時、俄然不意撃を喰はしたから流石の先生いさゝか狼狽の體で、迅雷の耳を掩ふに違あらざるが如き勢ひで攻め落したのさ、随分と骨が折れたよ、何分あの通りの人物だからね」

「だらう、容易に承知する筈はないさ、かねて持論の無妻主義も當世いはゆる薄志弱行の平凡書生が生嚙りの厭世的に机の上から来たのでなく、實際おのれが肺肝から絞りに出して、しかも其持論を生涯履行するに足るべき男だからな、しかし君、どうだ、その上田が君、あの晩の景況は、殆ど人事の裏面に伏せる微妙の消息を傳へて一種いふべからざるの狀を呈したぜ、つまり人間は戀愛的の動物たるを免れんな、到底、女に對する男、男に對する女だよ、男女相合してこゝに一個の人なるものを成し、男女おのゝ別に孤立すれば殆どこれ社會的の不具者だぜ、はゝゝゝゝゝゝ」

「なるほど、さういへば結果そんなものだな、ところで上田は兎も角、あの清ね、彼女また頗る妙だつたよ、あの様子ぢやア人知れず前々から上田に對して聊か意があつたかも知れないぜ、はゝゝゝゝもし世間普通の女から上田なるものを見たらば君、そもゝゝどこが宜からう、迎も無効だね、殆ど取捨の價値もないくらゐのもんだ、まして女といふもなア元來づゝゝしい難物で、おのれが身分も容貌も馬鹿は猶更ら一切すべて棚へ上げて置きながら、みだりに過分の非望を企て、無遠慮千萬に慾の深いものだ、是に於て乎あの清なるものも、また尋常一般の下女風情でないといふ事が判るよ、なるほど僕の家にも數年も居て、常に我々が上田を遇する言行より其批評などを聞き嚙つて居るから、いつの間にか化せられて多少は世間凡俗の婦女子より價をよく買つて居たらうが、まさか隨喜渴仰の涙で感謝すべき筈はないよ、それが君、あの通りの體、殆ど十年の戀を一夜に果すが如き風情で、彼女あの縁談があ

ツて以來といふものは、何だかソワ／＼として更に物が手に附かなかつた處を見ると、由來あの上田に對して殊更に馴れ／＼しく滑稽じみた點なども實は一種の戀愛だつたに相違ない、無論、上田のこつたから萬事に艶も色もなく眞向梨割の勢ひでなかく、酷い罵詈雑言をやり居つたがね、お清さらに念頭にかげざるのみか、むしろ殘酷なる上田の罵詈雑言を以て内心の快として居たやうな調子もあつたからね、そのみならず、祝言の三四日前、僕が清に對うて問うた事がある、上田は元來あんな男で浮世を渡るといふ點に就いては頗る下手だから、どんなことで衣食に窮するかも知れないが、もし其時は和女どうする決心だと問うたのさ、するとね、彼女が曰くたとひ妾が生爪を剥がして骨を粉にしても一所懸命あの方お一人は養つて行きますツて、君、どうだこの一言、實に彼が嫁入荷物中の金玉だぜ」

「や眞實だよ、上田が妻としての清、お清が良人としての上田、こりやア實に天下第一

品の夫婦だ、古今を通じて得易からざるの伉儷だ、願はくは早く子を産ませて見たいな、上田が妻に對しての言行また一種の奇だらうが、もし彼が子に對するの行爲に至つては更に奇中の奇だらうぜ、時に新夫婦が新枕以來の景況どうだ、今日で四日目これから、不意を襲うて見ようぢやアないか」

「いや、よせ／＼、あのまゝそつとして置いて、先方から遣つて來るのを待つ方が却ツて一興だよ、しかし今ごろは何をしてるだらう、いくら上田だつて少しは様子が變つてるぜ、まさか例の勢ひで、こら家鴨め、やアお清君ともいふまいからね、はは／＼」

「上田ばかりぢやアない、あの清の様子も見たいな、何と言つて呼ぶだらう、もし良人、ちよいと良人や、もし旦那様、は／＼／＼／＼上田が旦那様と來ちやア殆ど滑稽だ、いや事々物々いろんなことを想像すると、いよ／＼以て呵しい夫婦だ、あれで

も君、永久の間にやア夫婦喧嘩をするだらうね、はッは ヽヽヽヽ」

世間普通の夫婦とは頗る變りて萬事に一風一流の男女、まして結婚以來いまだ日も淺ければ、みだりに襲うて調子を狂はせ不意を訪うて驚かさんは氣の毒なりと、いづれも差控へて其の來るを待ちしに、七日目の朝、川上と倉橋が許へ同じ一封の郵便、披き見れば

新婚旅行なるものをいたし候

上田 力
同 きよ子

流石の川上も倉橋も、あツと一時に呆れぬ、さてもくく上田に似合はぬ味をやツたるものかな、彼等夫婦が朝夕の言葉さへ思へば呵しきに、五尺八寸二十貫目の山の如き

大男と十七貫目の立白に似たる大女と、互に手を携へて新婚旅行とは一幅のボンチ晝そもくくいづこへ行きしぞ、まづ東海道筋では鎌倉か江の島か大磯か函根あたりか、東北線では大宮か宇都宮か日光までか、上總下總の方角では九十九里の濱邊か成田か銚子か、よもや潮來出島の洒落は知るまじ、いづれ遠くて五十里内外、近くば二十里前後の證據には、あはれ第一の持つべきものを持たざる筈と思ひの外、立出でしより十日目の郵便は何ぞ豈らん出雲國より、

拜啓、小生は甚だ馬鹿けたるやうに思ひ候へども、愚妻しきりに懇望いたし候故、出雲の大社、世俗いはゆる月下氷人さまへ御禮參詣をいたし候
萬事の用意は愚妻が臍くり金こゝに數十圓あり、御安心くださるべく候、以上、

川上と倉橋の兩人いよく呆れ返りて果は恐れ入り奉りぬ あゝ上田なるかな、上田なるかな、上田にあらば誰か斯おもしろさを解せん、誰かこの藝を演じ得べき、茫として自然の滑稽、漠として自然の情致、萬人一様の鎌倉江の島さては日光成田と思ひつゝ、よもや潮來出島の洒落を知るまじと嘲りしに、おもひきや出雲の大社より遠路わざくのろけまじりの一書に接せんとは、油斷大敵、歸京の後も我等うかく、寄り付かば、倒まに冷されて遁路を失ふべしと、いづれも今更に驚いて打笑ひぬ、

其九

川上と倉橋が引き受けての友誼、借屋ながら本所の横綱町に見苦しからぬ新築の二階屋、二階の八疊よりは隈田川を見渡し、階下は六疊二室に四疊半、三疊に續き、臺所は板敷もろとも二坪の取合はせ、縁日仕入の植込なれど青葉しける庭もあり、裏

口の木戸を開けば井戸も手の届く邊にありて、道路に對へる半窓の體裁、入口の格子も履脱石おのづから見え透きて、當時東京の家屋相場よりいへば下女一人に食客の二人ぐらゐあつても差支なき住居、せまき浮世の俗眼よりは本妻の角を恐れて妾を置くに足るべき家とも見るべし、

こゝに上田が妻を迎へしか、お清が良人を迎へしか、家も道具も一時に新調せしところへ、良人も妻も一時に入り込みしかば、これぞ全く相に逢ふ相生の松の翠色や相持の相世帯、嫁入か婿入か其間の差別さらに分らぬところが却つて我等夫婦の得意とぞ誇りぬ、

出雲の大社より立歸りし後は、さてこそ川上も倉橋も恐れて近寄り得ざるほどの睦しさ、しかも新世帯に夫婦たゞ二人の氣樂さは、餘所の見目にさへ餘りて羨まれぬ、大家の落魄れたる妻にあらず嬢様の貧乏せしにもあらで、厨の政事は八年間の修行を

得たる業、まして二人差對ひの小粒身代に何の造作かあるべき、ちよこくと戯る、
 が如く埒あけて濟まし込む體、かゝる境涯にはなくて叶はぬ働き女房に、良人はまた
 外貌にも似合はず、汐入村以來の自炊に馴れたる手並あつて、しかも一切萬事に無頓
 著の簡略單純、寢るにも起きるにも妻の手を待たねば、夫婦もろとも退屈して主な
 き家の留守番に來れるが如し、

「ねエおい、おい、おい、おい」

「はい、何ですよ、今こゝ、少して良人の襦袢が縫ひ上るところですから、勝手をい
 ふやうですが御用なら其處から仰しやいまし」

「いや、外でもないがね、何だか腹が減つて來たよ」

「ほ、ほ、ほ、小兒のやうに何ですなエ、お腹が減つたなして、お菓子も何もありませんやア

「しませんよ」

「飯だ、飯だ、飯だ、飯だ」

「お飯、いつの御飯です、全體、何時だと思つて居なさるの、晝からの二時やうく
 過ぎたばかりですよ」

「何時でも構はない、腹が減つたから飯を食ふ」

「あらまア戲事ぢやアない、しかも今日の晝御飯は常より遅くなつて、一時ごろでし
 たらう、それに良人また御飯を、ほ、ほ、ほ、ほ」

「何が呵しい、ある飯が食ひたくなつて食ふといふんだ、ありもしない鯛や鰻を今す
 ぐに食ふといふんぢやアない、さア食はう、今すぐに食ふぞ」

「あれ、大きな聲をしてさ、棟續きでなくつても隣屋とは板壁一重ですよ良人、みツ
 ともない、小さな聲で仰しやい」

「さう理窟を並べずに早く出してくれよ、全體この乃公も數年來の自炊して來たものだから、飯ぐらゐる和女に頼まなくって宜いがね、臺所の道具一個ちよいと觸つても喧しい細君だから、かくの如く手を束ねて哀訴嘆願に及ぶのさ」

「それで宜いんです、女房のあるかぎり男といふものは臺所の道具などに觸るもンぢやアありませんから」

「ぢやア早く出してくれ」

「ですから出しますさ、今すぐに出しますがね、毒ですよ、さう無法に召上ると、それよりか、今すこし堪忍なさい、夕御飲を早めますから、しかも今日はね、大變な御馳走がありますのよ、良人の知らない間に、ちやアンと拵へて仕舞つて御座います」

「ふむン、乃公の知らない間に、はてな、いくら祕密に製造しても、この獅子ッ鼻に

匂ふ筈だが」

「いえ〜、糞たもンでないから匂はないんです」

「糞物でない、何だらう、さう聞くと乃公いよく腹が減つて來た、どうだ、夕飯特別の繰上策」

「それでは斯うなさい、その御馳走とね、御酒を一本つけてあげますから、御飯を廢止にして」

「や、酒もあるのか、いつの間に酒を買つた」

「先刻、ちよいと横町の八百屋まで買物に行きましたらう、そら其時、肴屋で、鮪のおさしみ一人前、ついでに酒屋で三合、今夜ゆつくり上げようと思つて居ましたの、今日で肴も御酒も三日あけませんから」

「なるほど、うツかりして居たが、三日目毎に酒と肴がつくんだな、さても家憲の嚴

なるかな、以て細君の用意緻密を知る」

「なに、さうも限りませンの、時と場合に依つて其日の都合次第にしますがね、まづ斯うして置かないと家の爲になりませんから、萬事しばらく小泉町の二階借を思ひ出して御辛抱なさい」

「や、心得た、小泉町の二階ぢやア頗る寂寥なもんだつたぜ、まづ第一の馳走が金山寺味噌、やたら漬、くさやの乾魚、或は鹽ツからい雑魚の佃煮、乃至また焼芋に生醤油ぶツかけた奴、つまり手数の入らない價の廉い腐らないといふ三拍子うち揃つたものを案じ出すんだからね、は、は、は、面倒臭い時は土鍋のまゝ半熟の飯の上へ薬研堀の七味蕃椒を振り掛けて猶その上から沸湯を注いで一時に搔ツ込むのさ」

「ほ、は、は、は、まア無精なこと、全體どんな味がありますの」

「味、そもく味なんぞあるもんかね、飯の熱いのと蕃椒の辛いのが咽喉へ染み渡つ

て沸湯の湯氣が一種ふんと鼻を貫く鹽梅、いやはや何とも彼ともいふべからざるの變味だね、しかし、こりやア冬に限る、いかな寒中でも汗が出て一時を凌ぐに足るからな、時に取つては頗る妙だよ、は、は、は、」

上田が性と身には別けて不適當の品ながら、家と妻あるからは無くて叶はぬ長火鉢、これを起點として一家調度の配置を定むるといへば、固より亭主關白の位その前に坐して背後の柱に倚りながら、おもはぬ馳走の酒肴を置き並べつ、自己が世界に自己が杯をあけての味ひは殊更の甘露々々、さすがに嫌な心持にもあらねば、上田先生おもはず笑を含んで四邊を見廻しながら、

「實に面白いもんだね、呵しいもんだね、わづかに膝を容るゝばかりでも、かうして兎も角、家といふものを構へ、また女に妻といふ名を付してみると、なるほど、聊か妙だわい」

「おや何が妙ですの」

「何がッて、妙ぢやアないか、つまらない斯んな肴でも不意に現れて来るし、また半ほどでも酒の用意が出来てあつたりさ」

「ほ、ほ、ほ、不意に現れたの、出来てあるのと、何だか自然に湧いて来たやうですが、やはり皆お金の端ですよ」

「いや、わかッてる、その邊は能く承知してるがね、これが獨身で居ると今この境遇より多少の餘地があつても斯うは行かない、この藝が出来ないからな」

「そこです、人といふものは家が大事、大きくツても金持の潰れるのは忽然あツといふ間ですが、小さくツても田舎の農家は急に仆れませんからね」

「名言、正に然りだ、をりく和女は乃公よりも氣の利いた事をいふよ、何日だツたか、そら兩國橋の上で夜更の景を眺めて、こゝに月のないのが一入だと、いや感心

したね、川開きの花火と月と雪とで昔から名高い兩國橋を寧ろ闇夜が寂然した情を舍んで宜いたア面白かつた、萬事、人間は獨力獨行の自信と主義がなくツちやア無効だ、とかく今の俗物どもは自己の持論も無くて徒らに世の中を附和雷同するから癢に觸る」

「ほ、ほ、ほ、兩國橋に月は入らないというたのが、そんなに宜いんですかね、しかし良人、あの時の事を皆いちく覺えて在らッしやいますかね」

「あの時の事とは、どういふことだ」

「いッそ妾と貴方と夫婦になりませうかと、其時に良人、なんと仰しやツた」

「は、ほ、ほ、ほ、馬鹿、つまらない事をいふもんでない、もう一切、過ぎ去ツた事は互に言ひツこなしだぞ、宜いか」

「ほ、ほ、ほ、過ぎ去ツた事を言ひ出すと悉皆、良人が悪いもんだから少々きまりが宜

しくないンでせう、自分の氣が咎めて」

「何、乃公が悪いモンか、さういふ意味でない、過去を語るものは將來に於ける愚者なりといふ諺があるからだ」

「何故まだ過ぎた事をいふのは不可ないンです」

「いけない、何だか不可ない、いふことならンぞ馬鹿、全體つまらないからだ馬鹿」

「あれ馬鹿々々ツて、しかし妙なモンですことね、かうして夫婦になると、同じコツても、どツか優しいやうですね、あれほど口癖に仰しやツた家鴨が出ませんもの」

「ば、馬鹿、過去は一切無用だ、いふことならンといふに馬鹿め」

「も一度お清君が聞きたいことね、何だか思ひ出して懐しい氣がしますもの」

「や、こいつ女」

「それ、そろそろ元の口癖が出かゝりましたね」

「え、酒でも酌しろ馬鹿」

「しかし良人、夫婦の時は假令なンと言ツても、噛み付いても宜しいが、もし人でも來てる時、嫌ですよ、第一に良人が安く見られますからね」

「え、馬鹿、それくらゐの事は百も承知してゐるわい馬鹿」

「おやく、深川の豊年で馬鹿の安賣、くづし賣」

「えツもう無言だぞ」

「やれくまづこれで安心しました、いくら戯談でも隣屋などへ聞かれて實際の夫婦喧嘩とでも思はれちやア外聞が悪い、第一それに良人の聲が人並すぐれて大きいも

ンだから、知らない人は驚きますよ」

「地聲だ、元來だから仕方がない馬鹿」

「おやまた」

「は、は、は、は、は、は、今の馬鹿は、たつた一つ残つた賣り仕舞の馬鹿だよ」

「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、良人にしては少々出来過ぎた洒落ですよ」

「洒落、洒落なんぞ大俗凡下の猪鼻助がいふこつた」

「おや御免遊ばせ」

其十

上と下と隔ての天井板わづかに一枚、しかも同じ家に住む夫婦ながら、けふ一日は天地の相違に等しき別世界、あかの他人となつて物いふべからず顔見るべからず、茶も湯も入らぬ酒は猶更ら禁物と、たゞ鹽氣の握飯六合分を携へつゝ、わが書齋とせる二階の八疊へ閉ぢ籠りし良人の體、さては一癖殿、そろく呵しな事が始まつたりと思へども、お清この日は洗濯ものに追はれて忙しければ、つい晝ごろまで其まゝに打捨

て置きしが、あまり音なく聲なき不思議さに眉を蹙めつゝ、そつと二階へ忍び行き襖の隙間より差覗けば、上田先生こゝに沈黙考の體、さながら面壁の達磨に等しく床の間に對うて端坐し、肩を怒らし肱を張つて更に動かさず、唯をりく傍らに置ける握飯を擱んで、むしやくくと喰ひぬ、

しかも良人が對へる床の間には、新婚の祝儀として倉橋より贈られたる蓬萊の一軸ありし筈なるに、今日は巻き藏めて片隅に立てかけつゝ、あらたに自筆と覺しき唐紙一枚の大文字、ところぐ筆端を跳ね飛ばして踊るが如く、墨色まツくろに流れて露の滴るが如し、

これまでの婢清なるものならば恐れて其まゝに打過すべきも、今は連れ添ふ妻としてのお清、固より叱らるゝを承知の覺悟、すつと襖をあけて入れば、上田先生おもはず振り向いて、心に怒らねど目に角たてながら、

「おい、何の用だ、なんの用で来た、たとひ用があつても、けふ一日は逢はないと言つて置いたに馬鹿め」

「ほ、ほ、ほ、来たつて宜いぢやアありませんか、何も良人、知らない餘所のもんが這入つたんぢやアなしね」

「いけない、今日は餘所の人間も同じこつた、上と下との別世界、あかの他人と言つたのを忘れたか、妻として良人の命に従はざるは子として親に背くと一般、怪しからんこつた」

「悪けりやアあやまりますから御免下さいですが良人、全體、そこで何を」

「何でも宜い、そもく、卿の興り知るところにあらずだ、黙つて引退れ、この握り飯さへありやア今日中、汝に用はないんだ」

「あらまア、なさけないこと、妾は握り飯だけの價值より無いんですかねエ」

「は、ほ、ほ、時に取ツちやア握飯より價值もあるがね、まづ今日のところ、そんなもんだから諦めて早く階下へ降りろ」

「ほ、ほ、ほ、理由さへ聞かして戴けば直に降りますよ」

「理由とは何だ」

「何だつて其、良人が床の間に對つてさ、第一その床に張つてある唐紙の大きな字は何が書いて御坐いますの」

「あ、うるさい女だ、女子と小人に物とはる、は道中の胡麻の蠅に等しといふ昔の諺、仕方がない、ぢやア言つてやるから謹んで聞け、この唐紙に書いてあるのは

ね、今朝、乃公が筆を揮つたのだ、即ち其文に曰くさ、咄、汝は何を以て世に處せんとする乎、咄、汝は何を以て家を保たんとする乎、咄、汝は何を以て妻を養はんとする乎、咄、汝は何を以て身を終らんとする乎、世に處する能はず家を保つ能は

ず妻を養ふ能はず身を終るの道を知らざる汝は正に死すべし、咄々無用漢、嗚呼木偶人、頑冥不靈、魯鈍狂愚、白癡瘋癲、汚物醜塊、虎狼の徒、狗鼠の輩、ばか、どち、ふぬけ、たはけ、まぬけ、ひよつとこ、うんてれがン、いくぢなし、はぢしらず、と、斯う書いてあるんだ」

「おやまあ良人、ひどい事を仰しやるよ、理由もいはずにさ、馬鹿だの白癡だのと、よくもそんなに悪口がいはれますね、いくら妾にだつて」

「なアに、汝に言ッてるンぢやアない、こりやア乃公が乃公に言ッてるんだ」

「ほ、ほ、ほ、いよく、妾を馬鹿になさるよ、つまり其唐紙は良人が書いたンでせう、それに良人が自分で」

「いや、さう取ツちやア不可ない、これはね、上田力こゝに我みづから我を責むるの言で、いはゞ師父なく先輩もない孤獨の乃公だから、我みづから我を吐し我を嘲り我を

恥づかshめて居家處世を問ふのだ、つまり今までは極端の狷介不羈、この天地間を自己一人が住居と心得、しかも浮世といふ古今ふしぎの難物を向河岸の火事と見て濟ンだがね、儲こゝに妻を持ち家を構へ身を一戸の主人として世間普通の利害得失に聯ツた以上は、もはや例に依ッて例の如き上田ぢやア迎も無効だ、まして夫婦といへば子があるべき筈、一朝この上田に子でも出来た曉どうする、これを思ひ彼を想へば前途茫漠、一葉の舟が港を失ひ舵を失うて忽ち大海の怒濤激浪に逢ふよりも更に寒心すべきこつた、そこでね、乃公のやうな無頓着無調子な厄介物も、近來しきりと何だか氣になつて堪らないのよ、あゝ昔は物を思はざりけり、戀ならねども人事生涯の怖るべき魔力は、いつしか秋を報ずる風と一般、音もなく色もなく我家の軒を冒して肌冷かに攻め寄せ來居ツたわい、しかし徒らに呆れて臆病者の墓原に迷うたるが如きで濟まないから、こゝに奮然として大煩惱を起し猛然として大俗氣を發し、

いはゆる空中の樓閣そのまゝ描き出せし蓬萊の圖を取外して、我みづから我を罵り勵ますの文字に對ひ、けふ一日の間に將來の居家處世を決する思慮だ、川上の如き倉橋の如き當世に得易からざる友誼を以て我を扶くるも、上田力そのもの一人ならば由來の關係上、随分その扶助に甘んじて悠々たるところもあるがね、すでに汝といふ妻あり家あり子が出來た上は、いけない、彼の友誼に於て變らざるも我これを受くるに忍びずだ、心に感ずる友のため心に感ずる友を助け扶けらるゝは寧ろ人生の美事ともいへるが、人のために生活せる良人、人のために生活せる父、その妻として、その子として、や、いけない、殆ど人間の所爲でない、だから乃公は決心したよ、つまり今月今日かぎり、斷じて川上倉橋の恩を謝絶し、もし叶はずんば社會劣等の勞働をしても乃公は乃公だけの世を營むからは、は、は、は、橋の袂で立ん坊となり鐵道線路の工夫となつても、腕力たしかに三四人分の賃金を取つて見るがね、

まさか、さうも出來ないから今こゝで千思萬考の最中だ、あゝ汝も不幸な良人を持つて氣の毒だが、人爲の外の縁なるものが支配するところだ、あきらめて堪忍しろよ、當世の才子めいて價值以上の報酬は取れないが、また乃公は乃公の分相應、この天地いまだ顛倒せざるかぎりは何とか餬口の道はあるだらう」

お清おもはず涙を含んで差俯きしが、やがて振り上ぐる顔を反けて聲を曇らせながら、「そんな、そんな事を仰しやると、妾が堪りませんわ、これが世間なみくゝに飛び勝れた女でもあることか、妾のやうなもんを持つたがため、却つて良人に餘計な苦勞を」

「や、愚癡、その愚癡を誰に聞けといふんだ、今日この二階へ禁じたのも、それがためだ、馬鹿め、料理屋の勘定は自家の總菜より高いもんだ、今更ら役にも立たない、つまり無用の駄辯を止して早く降りろ、しかし安心しろよ、當世の天下いづれ

も才子と才子とが日夜競争の擱ひ合だから、却ッて愚者が其間に得べき安全の地は多いぞ、車を飛ばして駆け集る表門の參詣道より裏門の田圃道を錢なしで歩く方が却ッて怪我なしだ、もし神に靈あらば其靈驗また却ッて著しかるべき筈だ、わかッたか」

「は、はい、わかりました」

「さ、わかッたら安心して降りろ、いはゆる女の取越苦勞もしくば愚癡心配などといふものは、乃公よりも氣の利いた男を持つた女のすることだ」

「はい」

我みづから我を責むるの文に對うて、これを浮世の敵としながら、朝の七時ごろより頻りに苦戦せしが、その日の午後五時ごろ、やうく敵の中堅を突き破ッて凱歌をあ

けし勢ひに、をりしも夕餐の茶漬かッ込むや否、飄然として家を立出でつゝ川上が許を訪ひぬ、

生憎、川上は不在なれど、やがて歸るべき筈といふ、さらば待たんとて心易く馴れたるまゝ、かねての一室に打通れば、妻女たち立てて良人の名代、さまざまに待遇ながら、

「ねエ上田さん、此ごろは貴方、何だか以前のやうに來て下さらないことね」

「だッて別に用がないからです」

「空言を仰しやい、用のあるなしは兎も角、外に何か理由があるんでせう、ちよいと人には言はれない」

「理由、外に何の理由が」

「あらお恍けなさるよ、ほゝゝゝゝ、貴方にも似合はない、しかしそれが當然です、

今までの上田さんぢやアなし、さう無法やたらに、ほかく出さないのが情ですもの

「や、怖るべし女の執念、そろく〜と昔の復讐を始めますな、しかし僕は何事に就いても正々堂々、川上と貴女と新婚の當時だつて今のやうに持つて廻つた陰險な言で攻め寄せなかつた筈だが」

「おや、執念ぶかいの陰險だのと、何も貴方、そんな事で申すんぢやア御坐いませんた、今までのやうに、お手軽く出られないのが當然だといふのですよ、ほ、ほ、ほ、しかし上田さん、あんまり當然が過ぎますと、却つて不可ませんよ、つい、そら我まゝを仕合つてね、まさか癡話喧嘩もなさりますまいが」

「こりやアいよく怪しからん、自分がするからつて他人を」

「いえ〜どんな方でも貴方、こればかりは同じこと、しかし月下氷人様の本家本元

へ新婚旅行なさるほどですから、貴方ばかりは別かも知れません」

「はッは、〜、實に愚だ、馬鹿々々しい、ありやア僕の意見でない」

「貴方の御意見でないところが猶更、實に愚で馬鹿々々しい取るにも足らない女のいふことを聞き入れて、わざく〜あんな不便な土地まで、眞實、あの時お手紙を拜見して、しみぐ〜羨みましたよ、貴方のやうな優しい方を良人に持つた女は幸福の重疊だと思つて、ですから其お手紙は今でも妾が頂戴して大切に藏つて御坐いますの、もし良人が無理でも言ひ出した時の用意、これを御覽なさいと差出す心算で、ほ、ほ、〜」

「やア、いろんな方面から僕を酷めにかゝつたな、よろしい、いくらでも酷めなさい、そのかはり覺悟でせうな、近日のうち不意に新手を出して戦はせますからね」

「おやまア上田さん、新手とは全體、どなたのこつてすの」

「斷じて僕を捨て、貰ひたい」

川上おもはず兩眼を閉ぢて死せるが如く默然たりしが、しづかに組める腕を解いて重く膝上に置きながら、その膝を進めて上田の面體じつと見詰めぬ、

「いや、よくわかッた、君の君たる所正に斯くあるべきこッた、汐入村以來、今日に至るまでの君と、今日より將來に於ける君とを混同する川上でないから、その間に一言の挿むべき餘地なし、わかッた、わかッた、しかし君、これから何をやる心算だ、執るところの業は何だ、なるほど、失敬ながら世間の俗眼は君を以て才俊機敏の人とはいふまい、いふまいがね、僕は獨り君を以て寧ろ世間の才子よりも大體の結果に機敏の才と果斷の力を備へて居る人と信ずる、だから君が將來の生活上に就いては更に一點の危むところもないがね、また狷介みづから固持して動もすれば浮世通俗の反比例に出づるの點は君が長所にして君が短所だ、ところで通俗の

浮世なるものは人の長所を捨て、人の短所を捉へたもんだから、願はくは其方針を聞きたいね、及ばずながら、また愚見を呈して參考の一端に供する事もあるからね、いや、そこだよ、かくの如き僕だから、固より官吏になれる筈なし、商賣は猶更ら以ての事、その他の會社事業に就いても、節を折り意を枉けて日夜孜々勉勵したところであらう、先づ受附ぐらゐるだ、さらばとて自ら無職業といへる一種の業を有して世間を渡るの技倆は勿論、詩才に富める文筆の徒でなし舌鋒を用ふべき辯説の輩でなし、文明的専門の學術なし規則的組織の頭腦なし圓轉滑脱の才なし術數權謀の策なし、しかも叨りに人の驅使に甘んずる能はず無論、人を制御するの支配力を有せず、またその間に俯仰して一種の寄生蟲たる能はず、列舉し來れば唯これ二十貫目の大男もし世間普通に超ゆるものありとせば腕力の一あるのみだ、しかし今日の壯士となるまでに墮落し得ず、かの土方人足となつて衣食するも聊か早し、そもく上田力

が當世に對うて何の業を取らんか、まづ君、試みに撰擇して見てくれ」
 「は、は、は、さう自分から並べ立て、不意に問はれちやア困るよ、しかも人間生涯の大事なもの」

「人間生涯の大事といへば大事だがね、今こゝでいふのは單に生活問題だ、それも我々夫婦が飢餓に迫るといふ淺薄の點から割り出した衣食住で、つまり世間普通の暖衣飽食すら羨まざるの程度だから、まづ月に三十圓より四五十圓に至るの間に於て、上田が分相應の職業は如何だ、もし今さし當つて君の思慮中に浮ばずんば、乞ふ、この魯鈍なる無用の一癡漢をして十日間に起すの業を見てくれ、これ徒らに高恩の友へ對つて自己が工夫を誇るの意にあらず、實のところ、今こゝで明言せざるに於て大に其職業の起因あるんだからな、天意の廣大にして慈愛の深き、僕の如き愚物すら、奮つて起てば茲に安然たる衣食の道を賜ふ、は、は、は、」

「なアに僕の胸中に浮ばない事もないがね、あまり君が謙遜して、片ツ端から列擧し過ぎたから、ちよいと返答に窮するのさ、今、列擧した中にでも、立派に君が遣れる事は澤山ある筈だ、しかし十日間に奮起すべき名案を謹んで拜見しよう、ついでには其業の何たるを問はず、將來、君が世に對する一切すべての主義方針を近き一例の下に豫言的の批評すれば、まづ、かの黒田健次と正反對だらうと思ふ、彼は智なるが如くにして其結果は愚に等しく、君は愚なるが如くにして其結果は智に等しく彼の才は多方面にして事々物々の一端一角に逆り、君の才は集注的にして事物の大體に功を奏するだらう、彼の愛敬には毒言を含み、君の毒言には愛敬を含む、彼は一見、熱血なるに似て其實は冷血、君は一見、冷血なるに似て其實は熱血、彼は多辯に失し、君は無言に攫取す、彼の滑稽は爲にするところあり、君の滑稽は自然に洒々たるどころあり、彼は好んで精悍に誇るの徒、君は祕して度量に容るゝの

人、彼は常に疾走馳驅して躓き、君は常に悠悠寛歩して達す、その他すべての性行一切に於ても實に奇だ、兩々相對して殆ど黑白の好一對、僕も倉橋も君等二人を對照して其間に得たるところ随分あるからね、過日も倉橋が其正反對の點を三十七個所ばかり列舉して來たが、眞實、不思議だよ」

「や、それやア聊か皮相の見たるを免れずだ、しかも今こゝで僕が聞くに忍びず語るに忍びない點もあるがね、つまり黒田は君がいふほどの男でないよ、ありやア不幸にして浮世の繼子になつたのだ、また僕なんざア幸ひにして君の如き益友の下に自己が天性の愚を守つて今日に至りしもの、さして深い過誤のなかつたといふだけのことさ、むしろ無能力を表白すると一般、いざ浮世の舞臺に踏み出した以上は君、どうなるか知れるもんかね、はゝゝゝゝ」

其十一

人も人によりけり、世も世なりけり、そもく五百年前の山中に功名利達の念を斷つて遁れしが如き上田が、日夜もろくの罪惡をもて市街をなせるかと疑ふばかりなる今日の社會に對うて、十日間に獨立自營の道を求めんとする工夫、果して何の業ぞ、勿頸の知己たる川上倉橋にも語らず、友白髪まで連れ添ふべき妻のお清にも打明さで、おのれ一人こゝに何をか人知れぬ浮世の間道を見付け出せし體、おもはず片頬に微笑を含んで悠悠また寛々、

されど十日間に起すべき我職業に就いては、尠くとも一週間この東京全市をめぐるて具に觀察すべき必要ありと、妻に命じて六合の握り飯を二包の竹の皮に用意させ、別に十錢銀貨一枚と手帳鉛筆を携へながら、衣服のみは今の境涯とて流石に垢もなく破

綻もなけれど、例の帽子、例のステッキ、例の下駄、夜の明くるを待って家を飛び出し、夜に入ッて後いづこよりか歸り來りぬ、
出づるに語らず、歸るに語らず、出入ともに無言のまゝの終日、のそくと山の如き大兵いづこを彷徨うて何をかする、殆ど一個の怪物

四日目の午後二時ごろ、すでに用意の握飯六合分を一粒も餘さず食ひ込んだり、十錢の銀貨一枚を小賣酒屋の店頭に投じて茶の代りにコップの立飲みは濟んだり、いざや夜に入るまで意氣さらに新なる鐵脚の我世界ぞと、上田力こゝに悠々として下谷の佐竹が原より和泉橋に出でんとする折しも、第二醫院の此方を辻車に乗りながら、しかも其車の輪さへ數へ得べきほど緩漫なる車上に、瘦せ衰へたる病人は正しく黒田健次、もしやと歩を停め眼を睜れば、いよく黒田、さてはと上田そのまゝ走せ寄ッて

聲をかけぬ、

「おい黒田、黒田」

車上の健次おもはず驚いて振り返るや否、ぱつと忽ち兩眼を閉ぢつゝ、さながら小兒が物を偷みしが如く、しかも胸に枯れたる兩手を當て、差俯きぬ、

「おい黒田、どうした、どこへ往ッた」

「上田か、あゝ上田、僕は、僕ア君に對して、さらに言ふべき言葉はない、こゝこれを見てくれ、この兩眼の涙は君に對ッて何事か、かゝ語ッてるから」

「えゝ往來だ、つまらない事をいふな、しかし病中、獨りで何處へ往ッた」

「その、第二醫院まで、あゝ上田か、上田、君は實に、上田」

「上田々々だッて何のこッた、いくら病氣たアいへ君にしちやア聊か衰へ過ぎたぞ」

「衰へるところか、もはや僕ア生きたる屍だ」

「馬鹿、な、何を馬鹿な、しツかりしろ」

「いや、もう無効だ、去月の上旬、君の賜物に依って一度は全快しか、ツたがね、また忽然この通り」

「それほど弱ツて居ながら、獨りで病院へ、あの妻は附いて來ないのか」

「う、上田、その、其妻はね、僕を振り捨て、去ツたよ」

「何、あの貞婦が、あれほどの妻が病中の貴様を捨て、去ツたア、全體ど、どうしていつ」

「先月の二十七日、僕を捨て、現世を去ツた」

「えツ、し、死んだのか」

「いや死んだのぢやアない、この僕が多年の間、なぶり殺し、なぶり殺しに殺したのだツ」

「む、ウ」

其十二

出るにも入るにも言はず語らで、何を目的に何處を徘徊くやら、たゞ十日間に夫婦生涯安樂の種を拾はんとて、朝は東天より飛び出し夜に入りて後やうく歸るべき筈の良人が、今日に限りて午後三時ごろ、さては黄金の塊物でも掘り出して來たかと思ひの外、貧乏神の本體に等しく瘦せ衰へたる一個の病人を辻車に乗せつゝ、しかも其身は車後より附き隨うて歸り來し體に、お清アツと呆れて驚きぬ、上田しづかに車上の黒田を抱きおろして、二階の八疊に脊負ひ上げつゝ、押入より引き摺り出せし夜具を壁に差寄せながら其上に坐せしめ、また階下に降り來りて妻に對ひ、

「おい、かねて聞いてるだらう、あれが、そら黒田といッてね、川上や乃公と一つ鍋を喰ひ合ッた友達さ、しかし少々仔細あッて其後、打絶えて居るのが今日、ふと途中で逢ッたのよ、ところがあの通りの病人で、しかも多年の苦勞を仕合ッた鼻アに死なれて、殆ど慘澹の極に陥ッてる様子だから、ともかく連れて歸ッたのだ、時に何か、あッたかい毒にならない病人の食へさうなモンを考へて、出してやッてくれないか」

「おや、さうですか、かねん、お噂に聞いて居た、あれが黒田さん」

「汐入村へ始めて汝が尋ねて來た頃は、ちやうど彼奴が出奔した時で、爾來こゝに七年、あゝ水の流れと人の行末たア、よく言ッたことだねエ」

「ぢやア兎も角、何を上げませう」

「何ッて、乃公に分るもんか、汝が考へて拵へるさ」

「それでは、鶏卵の半熟、どうですか」

「むゝさうだ、それ〜」

また二階の八疊へ上り來て、今更ながら黒田の面體じツと見れば、きよろ〜と間斷なく運轉して一種の物凄き光りを帯びし大目玉も、今は睡れる如く茫として半眼に開きつゝ、しかも瞳子しづかに打沈んで光輝を失ひ、額際の青筋あらはれ頬骨高く脣端の色さへ褪め果てゝ、小兵ながら骨格皮肉の大丈夫なりし昔の面影どこへやら、瘦せ衰へたる手足は枯木の如く纒に身を支へて、をり〜苦しげの息を漏らしぬ、

「おい黒田、全體、醫者ア何と言ッてる」

「まづ肋膜炎、といふこッた」

「むゝ肋膜炎、そいつア猶更、大切に養生しなけりや不可ん、ところでね、先刻は途中だッたから、よくも聞かないが、實に氣の毒なは君の妻だ、悲惨の極、あの貞婦

が委細を聞くに忍びないが、あの可憐なる妻が、どういふ病氣で、さう俄に死んだのだ」

「上田、わづか二三度より逢った事のない君が、委しく聞くに忍びないといふほどの妻がことを、現在の僕が、どうして委細に語れるもんかね、懺弱く見えても大體が丈夫の性來、ふと風の心地ぐらゐに軽く思つて居たのが、つまり僕に取つて生涯の忘るべからざる遺憾、また妻が油斷大敵、なるほど風の心地で一夜寢込んでもね上田、もう起きられないのが當然の女だったよ、汐入村を出奔以來こゝに七年といふもの、何たる不幸ぞ、可哀さうに君、僕のやうな悪縁に取つつかれて、今日といふ今日さらに一日の娯樂どころか氣の休まる時もなく、長の星霜、苦勞も苦勞、實に上田、ありやア女といふよりも、むしろ人生慘澹の涙が凝結して、かりに女の容貌を形づくつて居つたのだね、つい當座の事と思つた感冒が、いよく死病と悟つて

落ち入る前日、その夜の二時か三時頃だったらう、この瘦せ枯れた僕の手首を、しつかりと掴んでね、コ、かう言つたよ、たとひ妾は今こゝで死んでも、更に何の、何の遺憾、どころか實は心で泣いて喜んで居る、何故といへば、いくら浮世といふものが残酷からつて、これぢやアあんまり残酷さに念が入り過ぎてゐるから、つまり妾の生命で、良人の生命を買ひ取るのかも知れない、どう考へても、夫婦もろとも落魄やうも落魄やう、こゝまで落魄れて、七年間あれほどの艱難苦勞が水の泡となるばかりか、この乞食小屋に等しい床板の上で、一時に枕を並べて一時に死ぬといふ筈が無いから、しかし、たゞ一事、なさけない、迷ひの種、残念なは良人の身上どうか早く全快して、も一度、世に出る姿を見て死にたい、もし妾が死んだら、さぞ困るだらう、その病氣を介抱するものが無いからつて、上田、さ、察してくれ、先刻も途中で言つた通り、妻は死んだのぢやアない、全く妻がために悪魔外道たる

僕が、七年間、なぶり殺しに殺して仕舞ったのだ」

「えッ黒田、もう止せ、言ふな、いふに及ばん」

「いや、まだ一事、君にいふことがある、いよく落ち入る曉方にね、たった一枚の煎餅蒲團を身に纏うて、わづかに首をあけながら、上田、君、君のことを言ッたぜ、もし他日、あの上田さんに逢ッたら、妾が死際まで、泣いて喜んで居ッたと、くれぐれ傳言へてくれッて上田、おい上田」

上田力きくや否、兩眼より溢れ出づる男泣きの涙を拭ひも得せず、達磨に似たる五體を小兒の如く震はして總齒を咬ひ占めながら、猛然として叫び出せし聲は高からねど吼ゆるに似たり、

「黒田、おい黒田、しツかりしろ、假令、たとひ貴様は天下萬人に厭はるゝ悪人でも奸毒でも、僕は貴様の妻に成り代ッて、たしかに介抱してやるぞ、幸ひ、この上田

も大に感ずるところあッて將に大俗中へ躍り出んとする折柄だ、よし引き受けた、死せし妻の一念と僕が實力の一端とを以て、必ず、きツと再び世に出さう、愚なりと雖も、心を決して眼を張りし男兒一呵の下に、うき世が何の絲瓜かあるべき、うぬッ」

愚なるが如く癡なるが如く、茫として世に容れられず、漠として人に知られず、しかも其性の一癖一流を帯びて圭角矯々たるところ、宛然これ古壯士の風采、また其胸襟の洒々落落として潔白單純の腸より、複雑混亂さらに際涯なき人事俗世の全般を割り出して一氣呵成の下に遂行せんとするところ、殆ど太古の民に等しく可憐の小兒に等しき此上田力が、百鬼夜行の毒刃をもて戦へるが如き今日の社會に對ひつゝ、生涯安樂の道を十日間に探り出さんとす、そもく何の業ぞ、

上田力續編

其一

むかしは百鬼夜行の圖を鳥羽僧正の繪卷物に見て驚き、今は百鬼晝行の怪を世間いたるところの眼前に見て何の絲瓜とも思はず、むかしは人知れぬ山奥に棲んで、をりをり里を荒せし窟の山賊も、今は市中の中央に大厦高樓を構へて玄關より乗り出す自用車に全盛を唄はれ、鐵砲よりも舌鋒の恐しさ、義理人情よりも自利身上の物凄さ、憤ツて振り上ぐる鐵拳より笑うて擱まる、懷中物の御用心、うかく歩けば何處に陷奔のあらうやら、沐猴にして冠する紳士の威嚴、狼の衣を纏ひし説法、善き衣着たる商人の口車、高帽子に禿けた額の角を隠す鬼もあり、白晝に金齒きらめく化物もあり、人を殺すにも野暮な白刃を用ひずして虚名を賣りし藪醫者と一般、そツと殺して置い

て倒さまに謝禮を取るの工夫さまぐ、罪惡の喇叭を吹き鳴らして貪慾非道の得物を打振りつゝ、朝斷夜討の入り亂れたる當世に、そもく上田力が如き清淨無垢の男、しかも玲瓏として珠玉に等しき潔白の男が、何として其生涯を無事に保つべきや、

た、見る五尺八寸二十貫目の大兵、のツそりとして歩む時は春の野に出づる牛の如く悠々として坐する時は賣れ残りし今戸焼の達磨に等しく、肱を枕に身を横たへて大字に睡れる時は山門の仁王を引き摺り出せしが如く、茫として世に容れられざれど世に煩はさるゝ憂ひなく、漠として人に知られざれど人に屈せらるゝ用なく、おもむろに白眼をもて世上を睨み人事俗界の百般を一笑に附し去らんとするのみか、我みづから我愚を守りて日夜に跳ね廻る智者才子を鼻頭に吹き飛ばし、我みづから我鈍を知りて富貴功名を臍茶の一興に嘲り、時にたまくと天真爛漫の滑稽を演じて洒々落々た

るところ、例に依つて例の如き上田先生かの力の君も、あはれ今は最愛し可哀の妻を
持ち空拳では濟まぬ一家を構へて浮世の風といふ奴に襲はれしより、急然この可憐漢
も世間普通の利害得失に聯りて、何とやら社會の複雑混亂を顧みつゝ、こゝに翻然と
して居家處世の方便を求めんとす、

みれば宛然たる古壯士の風采、また其心は潔白單純にして太古の民に等しく可憐の小
兒に似たる斯の上田力が、妻といふものを持ちしがため俄に山の如き大兵の身を驚か
して紛々たる俗世に衣食の道を求めんとするさへ哀れなるに、運命の神は何の戲事ぞ、
多年の貞婦に棄てられたる氣息奄々の病友かの黒田健次が最後の成る果てをも其身に
脊負はせつゝ、日夜惡魔が毒刃をもて戰へるが如き大俗の眞只中に投ぜんとす、そも
そも何たる悲惨ぞや、

されど上田力また例に依つて例の如き上田力にあらで、猛然として起ち翻然として奮

ひつゝ、罪惡の形づくれる如き今日の社會に對うて十日間に生涯の工夫を探り出さん
とす、あはれそもく何の業ぞ、

人も人、世間も世間、かの上田が如き一直線にして更に曲折なき單調の男が、日夜の
怒濤激浪に等しき今日の社會に對うて、夫婦生涯の工夫を十日の間に探り出さんとす、
しかも昨日今日やうく埒定めし二間まぐちの借屋住居に巢を構へての新世帯、まし
て身に一錢の餘裕もなき丸裸の赤手を振り廻して何をかなすと、汐入村以來こゝに十
餘年の親友たる川上三吉しきりに眉を顰めて小首を捻れども、さては其事かと思ひ當
るべき業も無きのみか、元來あの上田が天生として自己が信ずるところの成敗を見ず
んば他人の言を容るべき筈なく、また今更ら幾何の財力を與へんとすれども頑として
受くべき筈なければ、たゞ人知れず心を悩まして我身の如くに案じ煩ひぬ、

十日といひし其七日目の夕暮、例の如く飄然また忽然、ぶらりとして立關へ訪ひ來りし上田が聲に、をりしも奥の一室に差對ひし川上夫婦が、何とやら待ち兼ね顔に心いそく出て迎へて見れば、さすがに淫世の常、かくても妻といふものを持ちし良人の身とて、今までの垢染みたる布子一點しかも裾から襠褌が下り藤の紋所ぢやと鼻唄うたうて通せし破帽弊衣の上田にあらねども、元來が人並すぐれし大兵肥滿に幾度か仕立直せし木綿尺の悲しさ、猪毛の手足ぬツと現れて纏ひかねたる首筋元より襟の胸巾さへ合はず、石臼に似たる臀の邊りは絲の縫目も張り裂けんばかりの體、例のステツキを横たへて腰に六合分の握り飯を入れるべき空辨當をぶらつかせ、五分刈の頭髮は大道の砂塵埃に塗れて白く、おのづから市中の煤を吸ひ込む獅子ッ鼻の洞穴のみ黒く際立ちて、武者髭むしやくと伸び大目玉ぎろくくと光らせながら、山の如き兩肩を怒らし泣くやら吼ゆるやら正體さらに分らぬ滿面の笑を浮べつゝ、

「やア御夫婦お揃ひの出迎ひとは恐縮々々、今日は例の處世探險で日本橋方面から此濱町をかけたの涉獵さ、ところで、いづれ歸途は門前通行の道順になるから是非、立寄らうと思つて居つたのさ、さればとて別に用はなし、たゞ時に當家の夕飯は既に已に濟めりかね、はゝゝゝ、何まだ濟まない、今これからは天いまだ上田を捨てきざるところ、久しぶりで馳走にあづかりたいね、實は十日を期して今日が七日目、東天の鴉聲と共に飛び出し宵の明星を仰いで四里四方の隅々まで、毎日てくゝ歩きの一所懸命に梅干入の握飯ばかりで聊か閉口の折柄だ、はッはッはッどうです細君そもくこの笑聲も以前の笑ひ聲と少々調子が違つてゐるでせう、あはれむべし近來さらに膏ツ氣がなくて咽喉の樋に多少の損所が出来たからです、はゝゝゝゝ、それ今かういふうちにも段々と音聲が薄く低く幽に遠くなり行く體、可哀想でせう、はゝゝゝゝもはや無効だ、はゝゝゝゝに至つては悲鳴と一般、おのれの笑聲が自己

「の腸に徹へて響きますね、あ、堪らない」

上田の天生、今更ならねど、川上夫婦も思はず顔を見合はせて吹き出しながら、いざとて奥の一室へ導けば、朝夕に掃き清めて拭き磨いたる廊下に大の足跡べたく、下女が眉うち顰めて頬を膨らし目を丸くすれども先生さらに關せず、そのまゝ悠々と打通りて我家に歸りしが如く、さし出す坐蒲團に會釋もなく石臼の腰骨を埋め込んで、ふと傍らを見れば古伊萬里の鉢皿に積み重ねたる羊羹、をりしも腹は空いたり時刻はよし、おもはず我を忘れて右手を伸ばすや否、細君ちらと見付けし目と目に流石の上田も何とやら俄に撮みかねたる顔色、さりとして今更ら驚いて引きもならねば、羊羹の上まで届きし五本の指頭を一時に縮めて小田の蛙の鳴き損ねたるが如き鼻頭に小皺を寄せながら、

「細君、こゝ此手どうしてやりませう、怪しからん奴です」

細君はツと顔を赧めて呵しいやら氣の毒やら、果は堪へ兼ねて身を反けながら、

「ほゝゝゝあら上田さん何ですよ、御戯談を仰しやらずに、どうか召上ツて下さいなね」

「いや、お言葉ですがね、實は今、あまり甘さうな羊羹で咽喉が鳴ツて堪りませんから、禮に慣れざる野人の本體、つい何心なく出した手を貴女に、はゝゝゝゝそれ撮みあけた以上は寧ろ何でもないとツてすが、五指おもむろに下して今や將に撮み上げんとする一刹那でしたから、妙に變な工合で聊か狼狽しましたね、はゝゝゝ、男の目ぢやア眞正面から穴のあくほど睨み付けられても平氣ですが、ちらと女の横目で見付けられたといふもなア、頗る薄氣味の悪いモンですな、しかし御許容の出した上は、安心して喰ひますよ、構ひませんか、喰ひますぜ」

「あれ、上田さんは嫌な事ばかり仰しやるよ、何だか妾が」

ほろりと膳の上に落しぬ、

「粗衣粗食に甘んじて前途さらに茫漠たる無能の我に生涯の運命を託せし可憐の妻がはや夕暮の空を見上げて今や歸ると我を待ちつゝあるのみか、あはれ十年の苦樂を俱にせし最愛の貞婦を先だて、自己も將に其後を追はんとする氣息奄々の病友が、重き枕を敬て、我の歸りを待つかと思へば、川上、もう僕ア食ひたくない飲みたくない、酒も肴も止さう、願はくは此のまゝ料理そつくら貰つて歸つて、せめて一夜を慰めてやりたい」

「君の歸宅を待つ妻の外に誰が居るんだ、その病友とは」

「誰でもない、かの黒田がこつた」

「えッ黒田が君の家に、いつから、どうして」

「三日以前、ふと途中で逢つた時は既に半死半生の重態、それも其筈さ、彼奴がため

に玉の輿を乗り外して十年の日夜を泣きの涙で立て通した不幸不運の貞女、かの島なるものが君、あはれむべし一朝こゝに死して其あとに取残されたる健次の病勢ありやア當然さ、まだ多少の前途不見と元來の横着心が腹の底に残つてる奴だから、うよく動いて生き残つてるもの、もし僕をして彼の境遇にあらしめば人間萬事すでに既に休せりだね、しかし僕ア及ぶかぎり、黒田を捨てない決心だ、たとひ彼奴が如何なる奸佞の毒物にしろ、我ための友、我いまだ彼がために生きずと雖も今もし僕が彼を捨てた曉は彼こゝに忽ち死すべき悲運の極だから、まして過般來しはしば恩義の君を欺いて人知れず扶けてやつたくらるるもの、今は猶更ら以て、いはば死したる彼が貞婦に成り代つて遺憾なく介抱してやる決心だ、幸ひ僕も大に感ずるところあつて將に大俗中に躍り出でんとする折柄、どうせ以前の獨身ぢやアなし、一個の荷物が二個になつたと思やア何のこたアない、却つて責任の點から僕の幸福

「良人どうなさいましたの、いつもより今日は大變に遅かつたことね、そして其、その手に提けて在らッしやるのは、何處から」

「は、ハ、ハ、ハ、これか、こりやア川上の家へ立寄ッて貰うて來たのさ、や、酒も飲め料理も喰へと、相變らず氣の宜いものさ、夫婦で右左から勧めてくれたがね、酔ッちやア猶更ら遅くなるからッて、其まゝ悉皆、この通り引提けて來たのよ」

「おや、それぢやア良人まだ夕飯を召上らないンですね」

「いや喰ッた、この酒と料理は別に取寄せてくれたのだから、かうして無事に持つて歸ッたが、時分が當然に出した夕飯の膳は即座に平けて仕舞ッたのさ、しかも空腹で立つッけに盛り上げたのを十一杯、あとで茶漬が三杯か、たしか四杯だッたらうよ」

「あらまア、いくら何だッて、よく喰べられましたことね、しかし良人や、妾が居ッ

た頃は構ひませんが、今ぢやア氣心の知れない臺所の人達ばかりですから、あまり從來までの流で遣らないやうにして下さいよ、まして不自由ながら斯うして家もあり妾といふものもあるンですから、あの御夫婦こそ何をしても氣にする方ぢやア御坐いませんが、とかく奉公人の下種口は喧しい、うるさいもので、つい良人、いろんな陰言を言ひますからね、さぞ給仕に出た下婢が驚愕しましたらう」

「は、ハ、ハ、ハ、驚き居ッた様子だね、しかも和女が知ッてる平戸焼の古風な大茶碗だからな、およそ水なら二合半か小三合も入るだらう、全體あの茶碗は和女が見立てて乃公のに極めて置いたンださうだね」

「ほ、ハ、ハ、ハ、思ひ出しますワ、良人が始めて入らした時、通常の客に出すお茶碗で二十何杯、こりやア堪らない、お給仕が面倒だから、イツその事、どんぶり鉢にでもしようかと思ッたンですが、それぢやアあまり失禮だからと、やうくあの大茶

碗を見付け出して良人お一人きり特別にして置いたの、思へば妙なモンで其お茶碗が、そもく縁の端でしたよ、それこそ記念のため貰って在らっしゃれば宜いに」「は、は、は、は、馬鹿な、何を言ふんだ、つまらない、時に二階の病人は」「はい、今日はね、朝から御氣分が宜いって、ぶらく一室で運動もなさるし、お粥も平常よりは」

「む、さうか、そいつア先づ安心だ、もう寝たやうだね」

「わけて今日は病氣の善い故か、心持よく頻りに睡氣がさして堪らないから、上田の歸家まで待つ筈だが御免蒙って寝ると仰しやいましたよ」

「ぢやア静閑にして置け、しかし折角持つて歸った料理を喰はせないで残念だ、何かこの中で一品ぐらゐる口に合ふものがあるだらうから先づ彼奴に撰喰をさせてやらうと思つたに、ぢやア和女そのま、喰つて仕舞へ、まさか宵越しのものを病人に遣れ

まい、さア喰ふが宜い、随分うまさうだぜ」

「妾もいたゞきますが、良人も、それほど召上ったんですから御飯は止して、ちよいと御酒ばかり」

「いや、その邊の豫算なきにしもあらず、故に酒は一滴も飲まずに樽ぐるみ提げて歸つたのさ、三升あるからね、一升づゝとしても三日分」

「あれ、一升も良人」

「いけないか、ぢやア九合、もしそれも叶はずんば八合半、乃至七合ばかり」

「ほ、ほ、ほ、ほ、そんな未練らしい事を仰しやらずに五合とか三合とか思ひ切つた分量になさい、一日市中を駆け廻つて草臥れた身體へは酔が早くて毒ですよ」

「ぢやアせめて六合にしてくれ」

「あれまア良人にも似合はない吝な事を仰しやるよ、誰が一掬も飲みますものか、ど

子を孕ますんば只みる一個の快男兒奇男兒ながら、あはれむべし今や其奇を收め其快を忍んで大俗凡流の常に降らんとす、さながら亭々たる喬本の風に吹かれて野邊ふす草の葉に伴ふが如し、

借屋住居の天井板一枚を界として、上には世にも妻にも捨てられたる病友が重き枕を敬て、我を力と頼むあり、下には身も心も清き貞婦が生涯の苦樂をあけて生死たゞ我に倚るあり、しかも我肉を分ち我血を與へて生るゝ一子は應て我を父と呼びつゝ脊に纏ひ肩に攀ぢ膝に睡らんとす、あはれ其友に頼まれ其妻に倚られ其子に慕はれんとする我は當世そもく何物ぞ、いはゆる浮世の才子より見れば事に疎く時を知らざるの愚、いはゆる術數の策士より見れば殆ど齒牙にかけられざるの癡、富貴の目よりは乞食に等しく、權勢の目よりは瓦礫に等しく、頑たる硬直おのづから世俗に容れられず

寂たる孤立いたづらに市井の嘲弄を招いで、生來こゝに二十八年の間、いまだ會て社會に一寸の席も得取らざりしもの、しかも今日その社會は才子の便佞と策士の術數と富貴の豪華と權勢の跋扈跳梁をもて世俗に誇り市井を形づくれるもの、さらば我こゝに愚なり癡なり乞食瓦礫に等しき境涯として友を扶け妻を慰め最愛の子を育てんとす、さて難い哉、難い哉と人知れず五尺八寸二十貫目の大兵を縮めて壁に對ひつゝ無言の心中、誰か憐れむ、隙間を漏れ來る秋の風そよとの音もなく肌に染み渡りて、そもくこれが押し寄する浮世の斥候かや、ぞつと骨まで寒し、

其三

十日と定めし七日八日、はや今日は九日目、あすの一日が浮世の瀬戸際、人生の禍福吉凶たゞこの一刹那にありといふ其日の朝、上田が身に家を出で、心易く訪ふべきと

ころは四里四方の都會に濱町河岸の川上あるのみ、いつもながらの大聲張り上げて立關に叫ぶかと思ひの外、今日に限りて肅々たる體、しづかに案内を乞へば生憎川上が不在のよし、さらば細君にてもよし、是非に逢ひたしといふ、
外ならぬ客とて、そのまゝ一室に迎へ入れつゝ、慇懃に待遇せば、上田も會釋して坐に就くや否、例の鉢皿に盛り上げし羊羹ちらと目につけども、あはれや先日の失敗に懲りて容易に手を出さず、たゞ茶のみ飲んで何とやら更りたる風情に、川上が妻女おもはず微笑を浮べながら、

「上田さん、どうなさいましたの、良人が居らないからツて貴君、さう眞面目になさらずとも宜いぢやア御坐いませんか」

「いや、今日は例に依つて例の如き由來の上田力でない、ちと仔細あつて聊か眞面目に伺つたのです、しかし川上が不在で少々残念ですな」

「妾では、いけませんの、叶ひます御用なら承ツて置いて申し聞かせうが」

「なアに貴女で不可ないといふ理由ぢやアない、よし川上が居つたツて是非、貴女にも聞いて貰ひたい事なんで、つまり多年の恩義を蒙つた夫婦お揃ひの前で」

「おや、何だか大變、むづかしい事で御坐いますのね、ぢやア暫時お待ち遊ばせな、今日は據ない用事で小石川まで、なアに貴君、午前中には必ず歸りますから」

「なるほど、しかし、今日明日の兩日は上田が身に取ツて寸刻を争ふ大切の時日で、さう暢氣に待ツても居られませんから、ぢやア大略、貴女にまで、川上へは別に書面で委細を通ずる事に致しませう」

「あれ、いよく改ツて、むづかしうなりました事ね、あまり込み入ツた事ででも御坐いますなら、どうか妾は御免蒙りますよ」

「何、むづかしい事でも何でもない、いはゞ蒼海の一粟、あツても無くて目にもさへ

「お禮のみならず、暇乞に來ました」
 「もう妾は嫌です、知りません、貴君から、そんな事を承るのは眞平です、どうか良人の歸るまで」

「いや、決して例の戯談ぢやアない、眞實、今日は感謝に出た上田力です、今更ら改めて言ふべき事ぢやアないですがね、この上田は御存じの通り論外の難物かくの如き愚物鈍物で、檻に捕はれた猛獸と一般、人間界に遠い山奥か谷間ででもあれば、また自己の天性を恣にして俗世を罵るだけの料簡はありますがね、すでに一家を構へて妻帯した以上は即ち人間界の上田力、逆も世間普通の活動がないのみか、わるくすると浮世の鍵鎖に繋がれたまゝ箱の中へ打ち込まれた觀覽物になるかも知れないです、その無能無爲にして癡鈍なる上田が、こゝ一兩日のうち社會へ乗り出して、はゝゝゝゝ社會へ乗り出すといへば體裁が宜しいが、まづ世の中の最

も下層なる泥溝板の端くれに這ひ出して、自營獨立いやこれも言語が穩當でない、つまり飢ゑて死せざるの方便を取らうと決心したのです、とこゝろで斯く決心を極めて實行する曉は、もはや再び當家へ押し寄せてさ、おい川上、酒を飲まさるか、ねエ細君、腹が減りましたなどと、怪しからん不埒な所爲に勿論、かりにも門前に足を踏み掛けず途中で逢つても言葉を交さない覺悟です、しかし、こゝは變に取つて貰つちやア困る、實は僕の如きものが、今日の社會に這ひ出して衣食の道を求めんとすれば、既に自己の身を落して凡俗以下の賤業を取るより外はない、ね、とこゝろで一朝その賤業者となつて僅に露命を繋ぐ一個の下等民が、いやしくも門戸を張つて當世の紳士と稱せらるゝ夫婦へいかに舊友とて刃りに押し掛け行くなンざア頗る雙方の不利益です、つまり貴女の方では威嚴に關して無形の損を醸すの恐れあり、また僕の方では人間境遇の比較的から打算せられて、さらぬだに悒々たる不快の賤業

ますく不快を重ぬるの結果、忽ち有形の損を蒙る恐れありだ、ね、と斯ういへば
 貴女の心ぢやア、あゝ馬鹿は何處までも馬鹿強情なもんだ、上田は良人の舊友その
 妻は妾が手許に召使うた下婢、たとひ夫婦が年々月々の衣食を呉れてやッても差響
 く身代でない、と思はるゝかも知れませんがね、其處は即ち上田の頑たる愚あッて
 我みづから我を制する能はざるの狂態、なるほど我等夫婦の者が當家の餘徳に悠々
 として生活するの幸は幸なりと雖もさ、もし我等夫婦の間に子でも出來た曉は如何
 です、あはれ願はくは妻をして他人のために生活せる良人を持たせたくない、あは
 れ子をして他人のために生活せる父は猶更ら持たせたくないからです、由來の恩義
 を感謝すると共に將來に對する浮世の暇乞に來たとは以上の理由、どうか貴女から
 川上へ、よくね、よッく傳へて下さい、また折角これまで永久の間さらに何の越度
 もなく奉公してくれた婢を可哀さうに、つまらない男へ遣ッたとの後悔もありませ

うがね、その段は安心して貰ひたい、あの清なるもの今日は既に上田力が妻です、
 土を喰はゞ諸共、砂礫を嚙らば諸共、さらに他を見返り餘所を羨む女でないです、
 しかし、それがため却ッて一入この上田が男泣きの種ですよ
 いはゆる世の才子流より見れば我みづから我を苦しめんとする愚の極に似たれども、
 その天生としては正に斯くあるべき筈の上田力、語り終りて今まで堪へし兩眼の溜涙
 ほろ／＼と一時に落せば、何とやら物の哀れに打たれて身も心も引き入れらるゝが如
 き川上の妻女も、鬼に等しき上田が泣面を見るや否、あるにもあられず其まゝ兩の袖
 を顔に押し當て、聲を呑みつゝ泣き伏しぬ、
 泣けば泣かれ、泣かるれば泣く、戀ならねども互の情に終局なければ、上田力まづ涙
 を歛めて膝を進めつゝ、
 「ぢやア、もう歸ります、随分お身體を大事にして御機嫌ようなさいよ、また川上の

事、妻として良人に對する貴女のこつてすから、僕の如きものが無用の言ですが、どうか能くね、優しう事へてやッて下さい、萬に一つも幸ひにして人間らしい身にでもなれば、また從來のやうに遠慮なく伺ひますから、まづそれまでは殆ど音信不通、ところで上田が寸志として貴女に呈すべき物があります、愚物をりく思ひ出して貰ひたいといふでもなし、忘れずに再會の期を待っていたゞといふでなし、こりやア唯、ほんの滑稽半分、赤裸の上田が贈物いはゞ一時の戯事です、しかしながら、萬金を携へて東京市中を駈け廻つても俄に得べからざるもの、いかな華奢全盛の貴婦人と雖も所持せざるもの、即ち斯品です、もし男ならば煙草入か何かの緒締だが女の貴女ですから、まづ簪の玉にでもして下さい」

いひつゝ、袂を探つて丸く小さく紙に包みし物を取り出し、うやくしけに妻女の前に差置きしを、何ぞと披いて見れば一個の玉、玉は玉の形ながら瑪瑙にあらず琥珀にあらず

す眞珠にあらず珊瑚にあらず翡翠玉にあらず孔雀石にあらず流行の鷄血にもあらずして、唯これ光輝もなく艶もなく風情もなく趣味もなく金屬か石屬か天然か人造か更に判然せざるもの、ほんやりとして薄黒き中に黄と青とを帯びて一種いふべからざる色合、およそ五分玉とも稱すべきほどにて持てば案外に重量あり、さても如何なる品質もと頻りに眉を蹙むる横顔、上田力じろりと打見て座を乗り出しながら、

「いまだ曾て見た事はないでせう、さらに何か分りますまい、いまだ目に見ず更に分らざるところが即ち其物の貴重にして珍なる所以、また上田が贈物たる所以で、そもくその玉は僕の鼻糞です」

「え、ッ」

「諸、さう驚いたばかりぢやア何の趣味もなく味ひもなく、只これ汚穢といふばかり手に取るだも貴女お嫌でせうがね、およそ人間の鼻糞を絶えず集めて油断なく押し

だ家々の夢さめずや町つゞきの軒端うす闇う、秋ふけし夜明の空に肌寒く、ゆうべ一夜を取外せし辻待の車夫が轅棒に腰うちかけて居睡りながら股間に夾みし提灯の火影ほつと残りて、霜や置くらん乞食の子さへ通はぬ曉方の路上を、犬に吠えられつゝ山の如き大兵を動かして歩み行く良人の後影、さても氣の毒や何を目的に如何なる業をせんとてか、あれをあのみまゝの男一人で通さば空嘯いても通るべき立派の身を、こゝに連れ添ふ妻の我身ある故、いとしゃ斯ほどの苦勞さすかと思へば思へば涙の種、をりしも何處の鐘やら幽に響く音さへ身に染みぬくと物悲し、

たとひ氣に合はずとも官界の端か、よしや心に染ますとも會社めいたるところか、但しは其事に類似の身に叶うて月々これと定まりし給料でも取る事ならば、同じ悲しき中にもまた諦めて道理と思へど、人に追ひ使はれ人に頭を下けて養はるゝは死ぬより辛しとて、この世智辛い世の中に一錢の貯蓄もなき赤裸の身一個、しかも元來あの氣

象で一家の道を探し出さんとは、かへすぐも竹楊枝で石臼を貫くとやらの世諺、とても成らぬと知りながら今こゝで諫めても歎いても一切きかぬ氣の良人、されば十日といひしも今日の一日、せめて今夜の歸家を待ち受けて委細を聞くか、あすの朝の起き出づるを待って其様子を見るか、いづれにせよ、思ふだけの事、するだけの事をさせての後ならでは、我身の言葉を用ひまじとて、そのまゝ家内に入りつゝ猶も行末を案じ煩ひぬ、

をりしも其日の午前九時ごろ、門口に車の響き差止りて格子戸の開く音に、お清ふと見れば川上の妻女が入り来る體、

「おや奥様、まア貴女お一人で、もし御用でも御坐いますなら妾から伺ひますに、さアどうか此方へ」

「何ね、來て貰ふほどの用でもないから、ちよいと、時に上田さんは、お不在だらう

ねエ

「はい、和變らす例の通りで、今日は猶更ら朝早くから」

「それは宜い都合、ぢやアゆるく話ませう」

「しかし貴女、むさくるしう御坐いますよ、ほゝゝゝ」

もとは七年越しの主従ながら今は友達同志の妻と妻、されば川上の妻女より殊更に言葉とを和らけて優しくすれば、せらるゝほど浮世の常、お清また昔を忘れぬ心に一入の眞實を込めて良人と良人は兎も角、召使ひし身と召使はれし身の禮儀を捨てじとて、いよく慇懃に取扱ひぬ、

「貴女まアお一人で、わざゝゝ妾方へ、いかやうな御用で、さのみ遠いところでなし、此方から日に一度づゝは御伺ひ申さないぢやア濟まないで御坐いますが、ほゝゝほゝゝ妙なもので貴女、こんな小さな茅屋でも一家の世帯になりますと、ついく

出かねまして」

「其事はお互さ、また今日かうして来たのも別に大した用でも何でもないんですがね、久しぶりで顔も見たし、また上田さんの事に就いて少々、勿論、良人と相談して来ましたの」

「おやゝゝ、それならば猶更、妾から伺ひますに、御存じの通りの良人で御坐いますから定めし御迷惑な事ばかり、妾が御奉公いたして居ります時でさへ、おほえが御坐いますもの、あの一本調子で例の變窟、きツと持て餘してお困り遊ばすだらうと、をりゝゝ陰ながら心中でお謝罪いたしてばかり」

「いえゝゝさうでない事よ、かうして一家を持つてからは何處やら昔の上田さんと違ッて来て、をりゝゝお世辭や愛敬を、しかし其お世辭も愛敬も、あんまり不意の唐突ではゝゝゝゝ、實は御挨拶に困る事があるのよ、昨日の朝も入らしッてね、い

ろく／＼寂寥とした眞面目な談話なさるから妾も思はず涙ぐんで居る其中で、簪の玉を遣ると仰しやるの、どん／＼玉かと手に執つて見れば品質といひ色合といひ、さつぱり何だか分らない見た事もない不思議なもので、何といふ玉ですかと尋ねると、すましきツて、そりやア僕の鼻糞を固めたんだとさ、ほ／＼／＼／＼／＼それから其鼻糞についての講釋が凡そ二十分ばかり」

「あらまア、怪しからぬ、貴女に、あの鼻糞の玉を、いえさ眞實で御坐いますか、まアあの良人はね、實は貴女その玉を始め妾に遣ると申しましたんですが、聽いて見て腹が立つやら呵しいやら、あまり馬鹿々々しいから物も言はないで其ま／＼にして置きましたの、それを人もあらうに貴女へ、いや、よろしう御坐います、いくら戯談は戯談でも、あんまりな良人、今夜、歸りましたら頭上から嚙み付けてやります、いやはや呆れた事をする、油断も寸隙もなる良人ぢやアない、嗚お腹も立って在ら

ツしやいませうが、どうか貴女この清に免じて」

「なアに上田さんのこツたから、決して悪氣で下すツたのぢやなし、また講釋を承はれば全く深切の筋もあるのだから、むやみに小言をいはれては却つて妾が困ります、そんな事は兎も角、今日ここへ來ましたのはね、あの上田さんが近日、何か思ひついて商賣とかを、なさるとの事、そりやア眞實ですかね」

「いえ奥様、それに就きまして、妾から御相談では恐れ入りますが、どうか御心添へを願ひに出ようかと存じて居りました折柄で御坐います、なるほど、かうして一家を構へた上は、いつまで人様の御厄介になられるものでもなし、いづれ何とか身分相應の工夫をつけて、とは妾も最初から氣を揉み抜いて居りますが、またあの良人のやうに、いや十日のうちに探し出すの、誰が何と言つても乃公が遣つて退けるのと、萬事このむづかしい世の中で眼前の物を搔いたくるやうには、迎も貴女どうし

決してないんだから、その邊を能く呑み込んでね、必ず逆らはないやうにね」
 「は、はい、ありがたう御坐います、何と申す御縁やら七年越しの御奉公中も、わけ
 て御恩になりました上、身の嫁期を付けていた、いた今、また、かやうに御苦勞ば
 かりかけまして」

「いゝえさ何事もお互、上田さんと良人とが兄弟同然なもの、また其人に連れ添ふ女
 は女どしの同胞で、なんの遠慮も入るものですか、そして今いうた手紙のこと、を
 りくゝの様子を、そつとね、これは妾ばかりではないの、第一が良人の依頼です
 から」

「はい、承知いたしました、申し上げるさへ恐れ入りました事で、たゞ此上とも御見
 捨なう、萬事よろしく、お願い申し上げます」

「あれ、そんな、お見捨だなど、しかし、もう歸りませう」

「でも貴女、まだお早う御坐いますから」

「いえ、あまり長くなると却って、なアに逢はうと思へば同じ東京の市中なもの、ど
 うしたツて直ぐ逢へるし、また」

「で御坐いますか、それでは旦那様に、よろしう」

「かりにも旦那様などと言ツちやア、上田さんに悪いよ、やはり川上とお言ひなね、
 ほゝゝゝゝゝ」

「ほゝゝゝゝゝだツて貴女、口癖で御坐いますもの」

其日の夜に入りて歸り來りし良人の顔色、今更ながら差覗くが如くに打守れば、我お
 もひなしにや例の朱達磨に似たる色艶おのづから褪めて、ほつと太き眉の邊りに何と
 やら憂を宿せる體、しかも門の格子戸ひき開けて今歸つたと大音に叫ぶべきを、今夜

にかぎりて其聲もなく無言のまゝ火鉢の傍に坐しつゝ、妻の汲み出す茶を一口に呑んで、しづかに天井を見上げ耳を欬てしが、また差俯き勝に横を見て獨り咬くが如し、

「何でも宜いから早く飯をくれ」

さては浮世の常、おもふまゝならで、あれほど走りまはりし十日の苦勞も水の泡になりしかと、はや良人よりも連れ添ふ妻の我身に胸迫りて悲しく、用意の夕饗そのまゝ持ち出づれば、しづかに首肯いて箸とりながら、いつもの大茶碗に音たて、搔ッ込む勢ひもなく、わづかに平生の三分の一、

「あまり腹が減り過ぎた故か、今夜ア飯も甘くない、すぐ寢床を取ッてくれ、もう寢る、あゝ草臥れた、回首春秋二十七、正是臥龍始起時、畜生め、ちよッ」

舌鼓もろとも後方の柱に仆るゝ如く脊を凭せて、兩腕を組みつゝ、眼を閉ぢしが、俄に思ひ出せし如く起き直ッて、

「忘れたく、酒、まだ昨夜の酒がある筈だ、酒々、えゝ面倒だ、爛も下物も入るものか、冷酒のまんまで大茶碗についでくれ」

かゝる時には猶更ら心を配りて意を用ひつゝ、さらぬも平かならぬ氣を荒立てじと、妻のお清そのまゝ起ッて酒を持ち出しながら、

「冷酒では良人、毒ですから、ちよいと爛をしてあげませう、なアに手間の取れないこッてすから」

「むゝぢやア宜いやうにしてくれ、今夜ア、ぐツと一酔ひに寢て仕舞ッて、いよく翌朝からだ、うぬツ、やれないといふ事があるものか、勇氣一番、こゝが所謂男かい、ねエおい」

「はい、何だか妾には分りませんが、いよく翌日からと仰しやるのは例のことですか、ちやうど今日で十日目ですから」

「む、さうさ、例に依つて例の如き悠々寛々たる上田力も、もはや今夜だけだ、いよいよ翌日から紛々たる市井巷閭の凡俗に従うて齷齪たる一個の銅臭漢となるのさ、今日も今日、途中を歩きながら大に發明した事があるね、外でもない、いはゆる古昔の仙なるもの、即ち畫や詩文に残つてる仙人といふ奴ね、ありやア決して世間一般に思ふが如き神通力を得て霞を喰ひ水を飲んで生活した怪しいもんぢやアない、つまり志を當世に得ざる癩癖の高い奴等が、その志を枉げ其潔白を俗塵に汚されるが口惜しいから世を遁れて山間に棲んだものだね、しかも其山住居には必ず生涯を守るべき殖産の道を立て、居つたに相違ない、山を開いて桃を植うるとか梅林を作るとか米粟の類は猶更の事、つまり自己を養うて天壽を保つだけの用意はするが其外の利慾には一切さらに關せず焉といふのみのこつたね、そもく仙は讀んで字の如く山にある人といふの義、敢て不思議でも何でもない、たゞ人生の俗塵

を脱して悠々たる生命を山間に送りしばかり、これを思ふと今日かくの如き便利至極の俗界に生れながら乃公などは却つて古昔の仙人に笑はるゝかも知れないね、彼は人間を去つた山奥でも生活の道を求め、今この乃公は人間大俗の眞只中に居ながら生活の道を知らなかつたのだから、はゝゝ、仙を思へば仙ならざる我いよく恥ぢて奮發せんければならない、しかし其處だて、ねエお清、いつもいふ月給取は眞平御免を蒙つて、まづ見渡した今日のところ、この乃公に出来るもんは何だらう、この十日間に東京市中あらゆる隅々まで駆け廻つて種々さつたの業を見て歩いたがね、いづれも資本といふものが第一だ人が働くより金が働く世の中、そこで二日目からは其資本なるものを要せざる點のみに意を注いで考へたが、さて資本なき業は殆ど不生産的の業だ、不生産的を一步あやまれば忽ち破廉恥となる、この間の呼吸に頗る苦心したね、假令へば世間いはゆる壯士といふものだ、これならば持つて來

いの仕事で、萬一の事があつても通常の男五人や六人は蹴飛ばしてやる乃公だが、さて忍びない、されば力業を切賣する土方か仲仕の類こいつも妙でない、いづれも嫌だと言つたところで、こちくと小器用な手内職は出来ず、お世辭だらくの口車で利を取る業は不得手なり、いろく研究の後、さまざま考案を廻らした結果、こゝに五尺八寸二十貫目の體軀を持って餘すばかり、茫として一切さらに夢うつゝの中より、ふいと思ひついた事がある、はゝゝゝゝ、鶏を割くに牛刀を用ひるの歎ありと雖も、ちよいと呵しいこつた、がらにない小意氣なこつたがね、まア遣ツつて見るさ、しかも晝間は寢て置いて夜だけ稼ぐ業だ、資本は音聲ばかり、はゝゝゝゝはゝゝゝゝしかし上田力が凡俗の小人なほかつ潔しとせざるところに屈して、いや、言ふまい、今更ら何と言つても無効だ、いよく遣ると決心した以上は大に進んで遣るべし、遣るべし—

わが良人ながら世間なみくの男でもあることか、圖に外れて飛び抜けたる大兵肥満の此體軀が、がらにもない小意氣な聲を資本に晝寢て夜稼ぐとは、そもくいかなる業ぞ、牛の吼ゆるに似たる胴間聲また破鐘の響くが如き大聲、どれほど高う通ずればとて、夜ふかし往來を小唄淨瑠璃の流しでもあるまいし、此ごろ流行る編笠書生の何とか節さへ逆も出来る人でなし、さては家々の寢靜まる頃を考へて夢おどろかす廣告屋の新意匠かと思へども、がらにない小意氣な事といふからは、まさか其事にもあるまじと、さまざまに思案をめぐらせども更に解しかぬれば、お清おもはず膝を進めて良人の顔を見上げながら、

「全體、どういふ事なんです、音聲を資本で晝寢て夜稼ぐとは」
「なアに別段、どうといふほどの名案でもないがね、第一この面を客に見られないのが便利の一事で、勿論、資本も入らずに其場で現金取引の早勘定、しかも相手が女

だからね、辛からうが嫌だらうが、じつと堪へて一夜だけ出してくれ、よ、この一夜で失敗を取れば直に止すから、ね、わかッたらう、よし分らないにしろ、まづ分ツたとしてくれるさ」

その夜は其まゝ寢床に入りて枕に就きながら、偕つらく思へば定めなき浮世の人間の淺ましき、曾ては天下の高貴功名を曉の一笑に付して我たゞ獨り昂然たりしのみか、もし志を屈し意を枉けて單に衣食の道を求めんとすれば、手をあげ足を投ずるところ従うて人事易々たる事と思ひしに、あはれ恐しや、日本一の大都會を十日間さうに油断なく駈け廻つて眼前これといふ業もなく、あすよりは身を辻占賣に落しつゝ賤しき女童の手のうちに五厘一錢を乞はずば露命を繋ぎ得ざる我境涯、さてもくと今更に驚きながら、その夜の明るるや否、まづ二階に上りゆきて黒田の病状いかにと

見れば、はや起き出で、瘦せ衰へたる身を窓に倚せつゝ、しきりに曉の空を打見やりぬ、

「おい黒田、どうだね、過日中は朝から夜まで毎日々々出歩いて居つたから、つい自然、うっちゃり勝のやうで、さぞ淋しかつたらう、勿論、ぬかりのないやう萬事を妻に言ひ付けて置いたがね、や、大分に顔色が宜いやうだ、少しは氣分が引き立つたと見えるな、今日は幸ひ一日このまゝで家に居るから、ゆるく語らうよ、ねエとかく疾病といふ奴ア氣の悒鬱が手傳つて悪くするから、第一、心を丈夫に持つて確乎しろ、はゝゝゝ君が數年前の勢ひで、かの地獄の上の一足飛び、矢でも鐵砲でも持つて來いといふ得意の横車を曳き出す暢氣さが今こゝに半分もあれば、そんな病氣ぐらゐは絲瓜の皮、のんこの酒アの鼻唄で追ッ拂ふべき筈だがね、さて、さうも行くまいか人生悲惨の極、苦樂十年かの貞婦に死なれた後だもの、いや無理

もない、いくら君だッてねエ」
 づうくしさと度胸の太さと悪洒落と横着と才氣をもて汐入村以來こゝに十年の我ま
 ま勝手に飛び廻りし黒田健次も、今は昔の面影どこへやら消え失せて、瘦せ枯れたる
 身を我ながら持て餘しつゝ、曾ては闇をも貫く物凄き兩眼の瞳子まで、ほつと薄く光
 輝を失ひぬ、

「いや上田、決して僕の事を氣にかけてくれるな、今更だがね、往事を回顧すれば總
 て夢だ、元來この乃公のやうな奴は旅から旅の旅鴉で、野仆死して街道の並松を肥
 すべきが當然さ、ところを何の幸ぞ、君が如き過分の友を持つて斯く靜に病痾を養
 ふなンざア、殆ど人間運命の理に於てあるべからざるの怪、天公の配劑ちと狼狽へ
 てるぜ、第一、君の細君が世間普通の義理一片や口前ばかりの人情一片たア違ッて
 君が不在中は猶更の事、心の底から溢れ出づる同情の涙で懇切に僕を介抱してくれ

る芳志、まだこれでも聊か残ッてる腸に染み渡ッて實に感謝の言もないね、嗚呼こ
 の良人にして此妻ありたア當坐の世辭でない、この優しき芳志と身を碎いての深切
 と、また蔭ながら君を思うて念々切々さらに意を安ンぜざる貞節を見る毎に、僕ア
 泣くよ、思ひ出さずに居られるかい上田、さゝ察してくれ」

「むゝ、なるほど、むゝ、なるほど」

「この黒田を君、眼前の手本にして、あんな貞女に苦勞さしてやるなよ、残酷だ、悲
 慘だ、もし僕は一朝こゝに全快して再び舊の壯健になるとも、決して生涯斷じて
 僕ア二度の妻帯しない覺悟だ」

「馬鹿、知れた事いへ、あの、あれほどの貞婦を貴様、殺して置いて、二度目の妻で
 も迎へて見ろ、第一この上田が許すもンか」

「だからさ、しないといふのさ、この後の生涯、斷じて無妻と言ッたのさ」

「當然よ、わざ／＼念を押すに及ばないこつた、そんな分り切つた事をいふ手間で養生專一、はやく全快しろ、まだ君には委しく話さないが、この乃公も、いよく今夜から浮世に這ひ出す初陣の首途、そも／＼錢といふものを儲けて見る決心さ」

「いや、その邊の苦心慘澹は察しないでもない、をり／＼細君がね、心配の餘り僕に言ッてる事もあるさ、しかし君、全體どういふこつたね」

「は、は、は、は、さう眞正面から一文字に問はれちやア聊か逡巡するがね、ちよいと、つまらない、殆ど兒戯に等しい筆はじめ、いろはさ」

「いろは、にも段々ありでな」

「その段々も何も構はず、たゞ僕が思ツたまゝの眼前、いは、途中で物を拾つたも同然、論も仔細も儲置いて、辻占を賣ッて見ようと思ふのさ」

「辻占、辻占たア全體どういふ辻占だ」

「戀の辻占、あぶり出しの辻占さ、小さい紙の端へ明礬で書いて、あぶり出しの文句を賣る辻占のことよ」

「や、こいつア驚いた」

「いくら驚いても止めても、すでに志を屈し意を枉けたる論外の僕、もはや決して止めないぞ」

「いや決して止めもしない、また驚いたは案外の馬鹿らしさに一驚を喫したのぢやアない、實に君か如き高潔な人物でも一度この浮世といふ魔界に對へば、怖しや斯る際どい點にまで意志の作用が行き届くに驚いたのさ、やるべし／＼、むしろ眞面目な糞料簡で癩に解る唐變木を相手にするよりやア、事が手輕くて物が洒落れて居て面白いよ、君の如き大兵肥滿な辻占賣は古今未曾有の珍だ、その聲で吐鳴り歩くところ實に奇だ、珍と奇は是れ俗物の目を驚かし耳を敬つる所以、我ために耳目すで

に集れば我その間に多少の勝を占めたりといふべしだ」

「は、は、は、は、は、は、黒田健次いまだ衰へず、どうしても君の口吻だ、こんな事になると身に病痾ありとは思はれない氣焔だね、君でなきやア先づ譽めてくれないこつたね、ところで相談だが、その戀の文句なるものに至つては上田力これ門外漢、さらに分らないんだが」

「おい来た、そんな事は僕の得手だ、茶らッほこの駄洒落か何かで戀の奴の鼻頭を抉ッて鼠鳴きさすやうな藝は僕の得たるところだ、よし、受けた」

「ぢやア幸ひ、といふのも情ない業だが、まづ頼むよ」

「しかし上田、思やア實に濟まない事ばかりだ、曾ては連れ添ふ貞節の妻に皮も破れし古三味線を抱へて人の軒に立たしめ、今また朋友も朋友、そもく君が如き友に

辻占を賣らせて慘澹たる其苦勞を絞り取るとは、黒田健次いよく罪の深い奴だ、逆も助かるまいぜ、この病氣で」

「えッ、がらにもない愚癡をこぼさないで、そろく辻占の文句でも考へろ、しかしなるべく階下へ知れないやうに、そつと遣ッてくれよ、どうせ分ることだが、あまり騒がしう聞かせたくないから、明礬も白紙も既に用意してあるさ」

其五

そもく春の花に浮かれてより、戀も身に染む秋の夜は一入さらに情も深く、三味の音じめの忍び駒、そつと何處へやら繋いで置いて、癡話と口説の四疊半より脱け出でたる二人の姿、今の情怨の中直りに其處ら一遍ぐるりと散歩の體、男は袴の重ね着に庭下駄を履いて鼻唄をうたひつ、女も左褌とるが嫌さに其ま、からけての引揚げ帯、

をりしも夜は更けたり往來の人はなし、ほつと薄闇の星明りに手を携へて、これが此
まゝ添はるゝならばと、互の心中に祈り合うたる風情、柳橋の上より漕ぎ行く舟の櫓
拍子に火影ちらつく大川の流水を見渡しながら、なほも睦しげに寄り添うて何をか私
語く背後に聲あり、大喝一聲、

「辻占ッ」

きやツと叫びし女の聲もろとも、男も驚いて飛び退きながら振り返れば、編笠に面を
包んで見上ぐるばかりの大兵肥満、ぬツと仁王立に立はだかりぬ、

「辻占を買ひませんか、戀の辻占、あぶり出しの辻占、辻占ッ」

戀の剛者は得て臆病神の氏子、色香も深く纏れ合うたる二人の鼻頭へ生憎消えかゝる
提灯の火をつきつけられて、雲衝くばかりの大男が前に立塞がりながら、辻占と叫ぶ
聲さへ耳朶を貫く破鐘聲、をりしも夜は更けて四邊に人はなし、これほどの大男が辻

占賣とは不思議の至極、うかく謝れば如何なる目や逢ふらんと、背後に隠れて取纏
る女を圍ひながら、こゝが色男の本體、聲さへ震ひ勝に小腰を屈めて、

「只今、ちよいと散歩に出たんですから、別に持合はせも御坐いませんが、おい和女
幾分か持つて居ないか、何、巾着に銀貨が少々、ぢやアそれを上げな、もし、どう
か、あるだけで」

「むゝあるだけ買つて下さるか、僕の賣る辻占は一枚が五厘で二枚が一錢、あぶり出
して御覽なさい、君のやうな情緒纏綿たる今夜の快を更に一層たすけて言ふべから
ざるの興を添へますぜ、はゝゝゝゝ」

「いえ貴方、その辻占は宜しう御坐いますから」

「これは怪しからん、いやしくも今日たゞ錢を貰ふ理由がない、辻占を賣つて相當の
代價を乞ふんです、まづ幾枚あけませうかね」

「幾枚でも、思召だけで宜しう御坐います、おい和女、早く出さないかね、何を、ぐづくしてるとだ早くさ、お手間を取らしちやア悪いよ」

「や、こりやア大變な銀貨だ、全體いくらあるんです、何、わからない、は、は、は、流石は金を湯水の境涯、この様子ぢやアなかく、浪費ひますな、そもく一家の主ですか、但しは親が、りですか」

「恐れ入ります、どうか、それだけで」

「これぢやア多過ぎる、こゝにある辻占が、一、り三十五枚で、六、り七枚、代價にして七十八錢五厘ですが、不意の上客、みんな買ッて下さるから七十錢に負けて置きます、即ち五十錢銀貨一枚と二十錢貨一枚、残餘は儘に返しますぜ」

いひつゝあるだけの辻占を渡して、残る銀貨を其まゝ返すや否、男女は手を引き合つて小走りに遁け行く背後より、おもはぬ嬉しさに我を忘れて猶更の大喝一聲、

「ありがたう」

「またもや聲に驚いて、闇を走せ行く楚首いよく高し、」

もとより斯人を男に持ちて浮世の榮華を願はん心は夢さらく、するほどの苦勞して添ひ遂げるは覺悟の前のみか、同じ苦勞をする上は我身を粉に砕いても今までの潔白男そのまゝの上田力で置きたいが山々、ならば生涯を立て養ひにしたいほどなれど、まだ連れ添うてから日も浅いに女の出過ぎた振舞と、はやる心を押へて時機を待ちし甲斐もなう、いつしか先駆せられての今更、いかに身過ぎ世過ぎの業とはいへ、あれほど立派な大男に悲しや辻占を賣らして何とする、されど今夜の初陣に破れたらば其まま思ひ止らんといひし一言が、せめてのこと、折角の首途を折ッて行末ながき氣を腐らせむよりは、必ず仕損じて歸るべき自然の結果を押へての諫言こそと、たゞ獨り吊

ランプの下に坐して良人のシャツを繕ふ妻のお清、をりく、柱時計を見上げては人し
れぬ心中の苦痛、ほつと歎息を漏らしぬ、

肌寒く次第に更け行く秋の夜の戸を叩く響さへ加はりて、往來の人の蹠音も絶え果て、
た、横町の犬の遠吠えのみ幽に聞ゆる其夜の一時ごろ、門口の戸を叩く音あり、

「おい歸ッて來たぜ、あけてくれ」

お清はツと飛び立つ思ひ、そのまゝ走せ出で、門口の扉を引き開くれば、携へし提灯
の火も消えて眞暗闇に良人の姿

「おや、お歸り、さぞまア、草臥れたこッてせう」

「なアに乃公より和女、まだ起きて居ったのか、かまはずに寝ちまへば宜いに」

いひつゝ、後ろ手に戸を閉ぢて、まだ霜は置かねど夜露に濡れし編笠を打振りつゝ、裾
を拂ひ足を拭うて火鉢の傍に坐すれば、はや埋火を掻き起して用意の小鍋立に茶より

も先づ酒の爛、ぶんと鼻を衝く香氣に上田おもはず笑を浮べながら、

「多謝、多謝、たとひ嚴寒の夜を冒して赤裸で稼ぎ通すとも、家に歸ッて最愛の妻が
斯くの如くんば人生の快だ、何をか羨み何をか歎かん、はゝゝゝゝ」

さも心地よけに聲をあけて笑ふ體、さては仕損じて歸りしにもあらざるか、わざと負
け惜しみを張り抜いての高笑ひでもないかと、お清そのまゝ小膝を進めて盃を渡しな
がら、

「どうで御坐いましたの」

「いや頗る閉口したね、なか／＼和女、急に吐鳴れるもんぢやアないよ、たとひ鬼神
を喝破するの勇ありと雖も、ぴらりしやらりと白粉くさい色町の中央で、そも／＼
御本人が乃公だ、かよふ千鳥の戀の辻占など、氣恥づかしい、眞面目な聲が出るも
ンかね、實ア幾度も中途から遁けて歸ッて、和女の面前で兜を脱がうかと思ツたが

ね、さて暫時こゝが浮世の初陣と勇氣一番、思ひ切つて叫んだ結果が和女、妙なものだね、家から持つて出た辻占一枚も残さず、得たるところの代價こゝに七十錢といひつゝ懐中を探つて五十錢と二十錢の銀貨二枚ころりと投げ出しぬ、
「この分ぢやア、少し勉強して一夜に一二圓を取るこたア易々たる業さ、尠くとも月に三十圓は河童の尻だ」

お清あまりの意外に驚いて呆れたるまゝ良人の顔を打守りしが、ふと心付いて見ればわづか五厘一錢の辻占に銅貨一枚もなく、たゞ五十錢と二十錢の銀貨ばかり二個とは不思議の至極、

「良人、そりやア眞實ですか、全く辻占を賣つて、それだけの、お錢を」

「眞實さ、虚言を吐いて何にするものか、實際、持つて出た辻占を賣り盡して七十錢しかも其うち幾分か負けてやつて七十錢だ、もし當然に取りやア八十錢近うなる筈

だつたが」

「おや、さうですか、ぢやア良人、どツかで取替へて歸ンたんですな」

「いゝや、何故」

「だつて良人、五厘一錢の辻占を賣るのに、さう銀貨二個と纏る理由が御坐いませんもの」

「はゝゝゝゝなるほど、乃公が悪かつた、そりやア其筈の理由がある、實ア斯うだよ」

手に持てる盃ぐつと飲み乾しながら、柳橋の上にてありし男女の事を語れば、お清おもはず吹き出して、

「でせうよ、そんな事でもなくつては良人、あんまり初めての手際が善過ぎて、どうも不思議ですもの、ほゝゝゝゝしかし可哀さうに、そりやア辻占を買つたのぢや

ない、不意に吐鳴りつけた良人の聲に驚いて振り返る途端、また薄闇を貫く良人の大兵に驚愕して、軽く見たところが破戸漢壯士の強請か、もし重く見れば追剥か辻強盗にでも出喰はした心持で、いはゞ生命からぐ抛け出して往ったのですよ、ことに依ると後で交番所へ届けたかも知れませんよ」

「や、畜生め、怪しからん男女だな」

「此方が良人、怪しからん奴に見られたのですよ、第一その體軀と其地聲で戀の辻占賣は逆も無効です、折角の思ひ立ですが、今夜のやうに一聲で七十錢の代價は二度とありませんから、もう止めて下さい、わざ／＼立派な大の男が人の寝る時分に作り聲を張り上げて歩かずとも、まだ外に何か面白い工夫がありますさ、もし假令、無いにしたところが、ま／＼なら今日明日のうちに飢ゑて死ぬでもなし、こゝは兎も角、當分この妾に任して置いて」

「いや、さういへば猶更、今夜の事は先づ論外として、翌日、もう一夜を試して見たい、いよく翌日の夜が不可なきやア、其時こそ方針を更めるから」

「よろしい、ぢやア翌日の夜の結果で、きつと妾の言ふことを、お聞きなさいませぬ」

「きく、きくさ、しかし、この七十錢、そも／＼これを上田力が生來こゝに始めて浮世から儲けた錢と思やア、何だか異なるもんだな」

「ほ／＼／＼／＼儲けたのなら宜しいが、威嚇かして取ったんですもの」

「む／＼なるほど、さういへば、さうかねエ」

「ですとも、誰が良人の辻占などを買ひますものかね」

「さやうか」

「第一あの黒田さんも随分いたづらな方だよ、妾の心配してる事を御存じで居なが

ら、病人の癖に餘計な智慧を付けてさ、辻占の文句を作ったり書いたり手傳ったり」折しも二階の黒田健次はまだ睡らで耳を欬てけん、そろく寢床を這ひ出して段梯子の口より階下を差覗きながら、病痾に勞れし皺枯れ聲、

「おい上田、あやまつてくれよ、細君に謝してくれれば、おい、第一、君がまずいよ、折角の初陣に遣り損つて来るからさ」
お清じろりと見上げて、

「おや黒田さん、まだ起きて在らつしやるの、御一緒に何か召上つたら如何です」

「いやもう決して、それには及びません、細君、實ア僕が悪かつたのですから、さう上田を、いぢめないやうにね、おい上田、目ばかり剝いて居すに何とか御機嫌を取れよ」

「憚りさまです、黒田さんは流石は御苦勞人、しかし良人はね、これくらゐで宜しい

の、ほ、ほ、ほ、ほ、

「や、いよく以て恐縮々々」

もし外の者ならば忽ち議論風生、さらに屈せざる男なれど、現在おのれが連れ添ふ最愛の妻に一本ぐつとまるられて聊か閉口しながら、なほいまだ止めざる二日目の夜に入るや否、例の編笠に面を包み戀の辻占と白字に染めぬいたる紅提灯を携へて、二十貫目の大兵のそくと歩み出しぬ、

柳橋は手近なれど、もし前夜の男女に出逢はゞ面倒なりと、さらに轉じて新橋烏森の二個所を目的とし、はや時の汐合を圖つて戀の湊の出舟入舟を覗ひつゝ、家々の軒端に吊せし御神燈の影より香粉の通ふところ、二階三階の畫樓廉内に色絲の鳴り響くところ、さては船板塀の待合に何とやら私語喃々の笑聲漏るゝところ、いづれも化生の

棲家を望んで勇氣を鼓しつつ、

「辻占ッ、戀の辻占、辻占ッ」

聲に驚いて二階の障子を引き開け門口の格子戸より走せ出でて見るものはあれども、たれ一人の呼び止めて辻占を買はんするものなく、およそ一時間ばかり叫びつゞけて更に何の甲斐もなき立腹まぎれ、ますく大聲を張り上げれば、いよく驚き恐れて近づかず、

「戀の辻占おもしろい辻占、一枚が五厘で二枚が一錢の辻占々々」

さらぬも大男の大跨にて廣からぬ烏森と新橋の間、はや同じ道を二三度目には、世間普通に飛び抜けたる破鐘聲を聞き覺えてや、ほつと餘光を漏らす江市屋格子の内に女の私語く聲、低けれど癡走ッて手に取るが如し、

「あれ、今の馬鹿聲がまた呻ッて來たよ、ちよいと買ッて見ようかねエ」

「およしよ、馬鹿なら宜いが、ありやア、きツと狂氣だよ」

「道理で先刻、そツと覗いて見て驚いたよ、まるで仁王様の出來損ひ」

「なアに馬鹿でも狂氣でもないさ、あんな奴には得て盜賊のあるもの、あゝして辻占を賣りながら家の様子を考へるんだよ、人並すぐれた圖體、定めし力量もあるだらうから車力でも何でも分相應の事をすれば宜いに、不料簡な奴は何處までも不料簡で、今に御覽、こゝ五日とは續かないよ、どうせ其うち、どツかで縛ッて牢に打ち込まれるから」

「だッて、あれでも人間のうちだから、お金でも澤山持ッて、お客様になりたからうねエ」

「初心な事をお言ひでないよ、いくら化けて身を飾ッたッて無効、第一あんな奴の目付が違ッてるから此方で受付けなさい、目付といやア穢多かも知れないよ、穢多とい

ふものは、天生づうくしくって太い奴だから、取るものが無いと其處らの下駄でも何でも、ちよいと引ッ攫ッて行くよ、用心おし」

「こんど吐鳴ッて通ッたら、鹽花でも頭上からぶッかけてやりたいね、延喜でもない汚れるワ」

何心なく足を停めて斯くと聞いたる上田力くわツと憤怒の心頭に編笠ゆらめくや否、おもはず躍りあがッて格子戸蹴破り雑言過言の女原いちく踏み殺してくれんかと思ひしが、いやまて、とるにも足らぬ賤しき賣女風情が世迷言、しかも現在の我こゝに今この姿を何とせん、あゝ己ぬるかなと其まゝ二三間を忍び足に行き過ぎし横合の小路より、どやくくと立現れし荒男四五人、

「やい、うぬア全體なんだ、とんな地聲を張り上ぎやアガッて唐變木め、この土地で鏢一文でも稼がうと思やア、するだけのところへ爲るだけの挨拶しろ河童野郎め、

はやく出ろ、うかく長居すると横ッ面に繩を通して引ッ張り廻すぞ土左衛門め」

「はゝゝゝゝゝ、唐變木に河童野郎に土左衛門か」

「や、こん畜生、ふざけた奴だ、なぐッちまへ」

それといふや否、四五人どツと一時に前後左右より飛び掛りしが、さらぬも天生の大力、まして悲憤の腕節張り切ッたる折柄、おツと喚いて水車の如く兩の拳を振り廻せば、地響き打ッて仆るゝ中より躍り越えて一文字に遁け出しぬ、

烏森と新橋の間を三四度ぐるく、およそ五時間ばかり叫び廻ッて一枚の辻占も賣れざるのみか、どこの馬の骨とも牛の骨とも知れざる不見轉藝者の口の端にかゝッて、あらゆる冷罵嘲弄に逢ひながら、我身の風俗を顧みて其面に唾さへ得かけず、そツと拔足して過ぎ行かんとする横合より、また四五人の下種に取巻かれて忽ち降り来る拳

の雨、いち／＼蹴飛ばして走せ去りしかど、おもへば無念心外、たとひ三度の食を減ずるとも白日青天の下に横行濶歩せば堂々たる偉丈夫の我、さるを宵闇に紛れて斯る體なればこそ徒らに鼠輩の恥辱をうく、もはや再び取るべき業ならずと、持てる提灯も辻占も其まゝ途上に投げ棄て、舌鼓うちながら、やう／＼我家に近づきしが、さて妻の手前お清に對うて何といふべき、昨夜に引き代へ今夜の始末と、我を忘れて停む背後の闇中より、

「良人まア早い足ですことね、妾は一所懸命、セツ／＼と息を切りましたよ、あゝ苦しかつたこと」

「や、和女、清ぢやないか、今ごろ、どこへ何しに往つたのだ」

「何處ツて、良人が家を出ると直、あとをつけて見えがくれに、しかし先刻の騒ぎにお怪我は御坐いませなんだの、妾は驚愕して、どうしようかと思ひましたよ」

「むゝさうか、乃公の後を、今まで和女が、つけて居たのかい」

「前から用意して置いて、良人が出ると其まゝ門戸を閉めて裏口から飛び出しましたの、しかし良人どうです、今夜一枚も賣れますまい、あれだけの間たゞの一枚も賣れませんでせう」

「なるほど、いよく降参した、もはや和女に對つて一言もない、何とも申譯のないこつた」

「さう得心さへなされば、それで結構、さア早く家へ歸つて、また一盃ぐつと召上れよ、その用意も出がけに、して置きましたから」

其六

浮世といふ奴、これほどの手剛いものとも思はざりしに、さすがの上田も案に相違し

ての敗北、まして我を思ふのあまり氣を揉み抜いて座にも得堪へず、そつと見えがくれに薄闇の影を追うて附添ひ來りし妻の手前、いよく面目なくて其夜は其ま、無言に打臥せしが、いつにない事、曉の鴉も雀の聲も聞き流して旭光すでに枕頭へ射し入れども、なほ起き出でず、頭上より夜着ひつかぶって物に懼れし龜の子に似たり、いかに岩疊の體軀とはいへ、さては此ほどよりの草臥に身も心も勞れ果て、我を忘るるばかりに寢込みしかと、お清そのま、打捨て、物音さへ靜かに立働さしが、八時九時十時、はや十一時になれども目の覺めぬ體、いつしか晝飯の用意も整ひて十二時に近づきしかば、しづかに枕頭へ立寄つて微笑を浮べながら、

「ねエ良人、もう正午ですよ、さア御飯を召上つて、また寢るなら寢るとなさいよ、あんまりお腹が空いちやア毒ですから、ねエ良人、よう」

いへども更に聲なければ、おもはず眉を擧めて夜着の襟そつと持ち上げつゝ、差覗けば、

巖窟の奥の燈明に等しき兩眼をぎろく、光らせながら上田先生なほ無言の體、

「あらまア、どうなすつたの、そんな大きな目を開いて居ながら、ちつとも返事なさないでさ、さア良人、正午ですよ」

「いや恐縮、恐縮」

「戲談ちやア御坐いませんよ、何だつて良人」

「いやさ恐れ入りました」

「ほ、ほ、ほ、何が、そんなに恐れ入つたんです」

「敗軍の將、兵を語らずと雖も、實はね、川上夫婦や和女に對つて、あんまり立派な大きい口を聞いてさ、いやしくも男兒が意を決して身を大俗に投ずるの結果、乞ふ見よとばかりに出は出たもの、儲あのだまだ、大の男が足を插槌にして十日間の東京市中を駆け廻つた甲斐もなう、まんまと首尾よく遣り損ねて斯くの始末、あ

あ迎も乃公は無効だ、始めて知る世路の難きを、それも最初の夜に得た七十銭を和女に笑はれた時、その意見を用ひて止せば宜かつたに、なほ糞強情を張り抜いて二日目の前夜、しかも和女に後をつけられてさ、一錢一厘は儲置き、すべた藝者の口の端に罵られ端奴に取巻かれて、はふくの體で遁け歸つた前夜の今朝、いくら何だつて和女、まじめな面をして朝飯の膳に對へるかい、いやもう閉口頓首再拜、しかしながら」

「それ良人、その、しかしながらといふのが、どうかすると事の間違ひですよ、しかしながらと仰しやるからは、また何か外に分別をなさる決心でせう」

「いやはや、さう手厳しう斫り込まれては、いよく以て乃公の立場がない、働き場所がなくなるからさ」

「立場がなくつて結構、働き場所のないのが却つて良人のためです、こゝ暫時は何に

もなさらないで、ジツとして在らっしゃい」

「だつて和女このまゝ、ジツとして居ちやア、第一、家を構へ妻を持ち將に子もあらんとする男が、しかも、わづか一敗に驚いて」

「だつて和女も妾もありやアしません、ジツとさへして居れば其うち、自然に良人の男が立つやうになりますからまア暫時は妾に任して置いて下さいよ、全體、良人のやうな方はね、わづか三四人の家内を養ふぐらゐの小さな事で、さう輕々しう、ばたくゝするもんぢやあ御坐いませんさ、この浮世といふものは不思議な理窟で、力があり過ぎては渡れず足らいでは猶更、つまり智慧があつて行かず馬鹿で通れず、その間の呼吸は九分と一分の兼合、輕業師の綱渡り、見て感心はするもの、儲その輕業師が世の中で大した人間かといふに、ほゝゝゝたゞの小屋藝人で、いはば大道乞食の錢貰ひと同じ理由ですから、羽織きて棧敷から見物する筈の良人が十

日や二十日の稽古では逆も無効、ですからね、さう心配なさらないで平氣に暢氣に、のツそりとして今までの十田一流で在らッしやい、その綱渡りは妾が仕て見せますから、しかし、女の癖に生意氣な出過ぎた業で、生涯いつまで良人に何もなさるなといふんぢやアないの、それこそ半歳なり一年なり二年でも三年越しでも、よッく考へた上で、いよくこれならばといふ立派な事をさへなさりやア、自然に良人の男が立ちませう、ね、これが華族か富豪の娘なら兎も角、七歳の時に兩親を失つて十二の春まで邪慳な伯母に追ひ使はれ、十三の暮から下女奉公をして他人の家で育つた妾ですもの、うき世の酸いも甘いも總身に染み込んで、苦勞といへば目の底の涙も出し切つて仕舞つたほどの苦勞した妾ですもの、萬事は安心して例の通りで悠悠と在らッしやい、ね、また、これくらゐの事がなくッちやア餘り幸福過ぎて罰が當りますよ、妾のやうな女の出來損ひが良人のやうな男を持ッてさ、當然ですよ、

ほ、ほ、ほ、この家鴨め、濱町川岸の棒杭めと仰しやッた事、よもや忘れて在らッしやるまいに」

きくや否、上田力また忽ち夜著の奥に藻潜り込んで息を殺し身を潜むる體、ぶツと吹き出しながらお清わざと手荒く跳ね退けて引き出せば、二十貫の大男こゝに小兒の如く目を閉ぢ首を縮めて手足を宙に藻搔きながら、

「御免下さい、御免下さい」

其七

うまれて物の怖しさと悲しさを知らず、まして身は金鐵の自慢たらしく鼻うごめかし、醫者と病痾と涙は大の禁物、飛ぶといは、人の家庫ひッさらうて地獄の釜の一足飛びも演ずべく喰ふといは、鬼でも蛇でも茶漬の菜に搔ッ込んで舌鼓うつほどの黒田

健次なりしが、一朝こゝに飛び損ね喰ひはぐれ宿昔青雲の志を失うてよりは、どつと一時に押し寄せ來りし浮世の不運、身は忽ち病痾に臥して一步も叶はぬのみか幸ひ自己に過ぎたる貞女のお鳥あればこそ、暫時は其古三味線の小唄に養はれしかど、またもや頼む樹下に雨漏りて、あとに取残されたる病みほうけの瘦せ男一疋、腐った魚の腸は田の肥料になり破れた反故は紙屑買の手に渡れど人間の半死半生は鏝一文の代價もなければ、こゝに始めて泣きも泣いたり涙の瀧津瀬、其まゝ泣死せんとせしを、やう／＼上田に助けられて餘命を繋ぐ今の心が、せめて三年前にあるならばと、今更ら迎も及ばぬ事を繰返して獨り枕を敬てぬ、

をりしも階下より上り來しは當家の大黒柱お清の方、小鍋の白粥に鶏卵の半熟と焼鹽とを持ち添へて、しづかに枕頭へ差寄りながら、

「黒田さん、今日は大分お顔の色が宜しいやうですことね、ちと早過ぎますが、少し

都合が御坐いますから、さア夕飯にして下さい、ソツプも差上げたんですが、明朝にして戴きたいの」

「や、ありがたう、いろ／＼さう氣をつけて貰ッちやア却ッて恐縮だ、なアに、もう死ぬ氣遣ひはないですよ、犬殺しに一撃ぐわんといはされた洋犬と一般、もし急所に當れば其まゝ、幸ひに外れた後が長引くんですから、喰へるものさへ喰はして戴けば自然に快くなりますさ、また御都合で、どツかへ出なさるなら構はないで、夕飯なンざア夜に入ッてからでも宜いんですに、全體どこへ往らッしやる、今日は朝から上田も不在な筈ですが」

「おや、階下に居た妾さへ、いつの間に抜けて出たか知らないに、貴君よく二階に寢て居て御存じなのね」

「しまッた」

「おや、いよくをかしい、しまつたとは何を、何の事です、は、ア貴君また何か相談に乗りましたね、智慧を附けましたね」

「いや決して、なか／＼以て、辻占の一件に懲りてからア猶更ら謹慎、お怨恨が忽ち身に報ふ今の境涯ですもの、爾來さやうな怪しからん事は」

「うそ、虚言を仰しやい、そんな柔かな術を喰ふ女と思つて在らッしやるの、あてが違ひますよ、さア真直に白状なさい」

「白状ツて、別に白状する事が」

「ないモンですか、屹度あるに相違なしの中央を見抜いて居ますさ、辻占の一件で、きのふ一日あれほど、おとなしう家に居ましたから、まづ安心だと思つて裏口で洗濯して朝の間に、また何處へ飛び出したまゝ、もう貴君、今日の夕方でせう、あの良人のこッてすから、さう一日も長居する知音の家はなし、もしあれば濱町一軒

これから一走り、ちよいと往つて見ようと思つて居ましたところ、妾に問ひ落され、しまつたと仰しやつた今の口振目付顔色、てつきり一つ穴の狐、同類でせう、それとも全く御存じない事なら、失禮千萬な女の癖に、疑つた妾が萬々すみませんから、此場で低頭平身して貴君に、お詫び致します、致しますがね黒田さん、もしも後で同類一件が露顯れたら、それこそ、きゝませんよ、いくら言譯なすつたツて無効ですよ、よろしいか、別に證據も御坐いませんが、しツかり念を押して置きますよ」

五分も隙さぬお清が目色、じツと黒田の顔を見詰めながら、しづかに居坐を直して兩手を疊に頭を下けんとすれば、流石の黒田も一期の浮沈、はツと驚いて思はず病みほうけたる身を蛇の如くに這ひ出でつゝ、お清の手首しかと握りぬ、

「眞平、眞平、平に此方から謝罪ります、ど、何卒この、此お手を上げて下さい」

「それ御覽なさい、貴君も随分お人が悪いよ、病氣で身體は細くなつて在らッしやるが太い方だよ」

「や、驚いた、こりやア驚いた、實に閉口しました、謹んで白状いたします、もはや已むを得ない」

「何が已むを得ないもンですか、ちと已むを得るやうな事をなさい」

「いやもう何と申されても一言なし、しかし細君、決して、この黒田は決して謀主でも何でもない、また智慧を付けるツて、つける智慧がありますもンか、たゞ上田に相談しかけられたから、なるほど、それも宜からう、ぐらゐの程度で」

「それも宜からうといふのは、全體どういふ事です」

「只今、申し上げます、あ、苦しい、貴女がね、あやまると言ッて居坐を直された時ぎよツとして思はず夜着を這ひ出した故か、この胸邊が、まだ病身だから、はツと

思ッた胸の動悸が」

「おや、それはまアお氣の毒さま、お茶か湯でも差上げませう」

「いや恐れ入ります、それには及びません、しかし細君、貴女アなか／＼うまいもンですな、天晴れ女丈夫、逆も上田が叶はない筈だ」

「今更ら木に竹を繼いだやうな空世辭を止してさ、早く聞かして下さい、良人の飛び出した理由を」

「なアに、さう深い仔細も何も無いンですがね、實ア今朝ちよいと二階へ来て、きのふ貴女に言ひ聞かされた段々、勿論、上田のこツてすから、殆ど半分は嬉し泣きに泣きながらの談話ですよ、なるほど妻の言ふところは理もあり貞もあり事實にも適ツて有難いは有難いが、もし餘り苦勞させ過ぎて身にも觸ツちやア取返しがないから、逆も無効として、も一度、乃公が何か衣食の道を探し出しに行く決ひさ、

しかし妻に言ッちやア引き留められるから、そツと今このまゝで出る、出るに就いては後を貴様に頼む、妻が心配せぬやう、うまく言ッてくれと」

「ほゝゝゝそれなら貴君、別段この妾に祕して狼狽へるにも及ばないぢやア御坐いませんか」

「はゝゝゝ今になツて見りやア、さうですがね、あんまり唐突に手厳しい不意討を喰ッて、どういふもんか其間に言ひそゝくれて仕舞ツたのです、これくらゐの事で狼狽へる黒田でもなかつたんですが、やはり病氣の故ですかなア」

「いえ病氣ばかりぢやア御坐いません、やツぱり貴君が悪いの、いくらか良人へ智慧を付けた覚えがあるからです、しかし、いつごろ歸ると言ひましたね」

「さ、そこだて、そこか少々ね、申し上げかねるところで」

「それ、今いつた通り、そろゝ貴君の困る事が出て來ませう」

「いや別に困る事も、しかし、かういふんです、前の十日の例もあるから、毎日々々家へ歸ッて來ちやア堪らないし、逆も二日目から出してくれないから、イツそ思ひ切ッて五日間、五日の間は木賃宿へでも泊り込んで一所懸命に探し歩く、もし五日間に何の功もなくンば、其時こそ貴様も一緒に謝ッてくれと、まづ斯ういふ約束で」

「おや、さうですか、五日間そのまま歸らないツて、さうですか、まア何といふ良人でせうね、きのふ妾が、あれほど事理を分けて頼むやうに言ツたものを」

「いや、その段は上田が重々恐れ入ッて半泣きに感謝してるんです、しかし心に嬉し泣きの涙あれば、あるほど猶更ら以て悠々として居られない、そこが即ち上田の上田たる所以で、もし僕なら、こいつア面白い鼻アを持ち當てたと其まゝ直に懐手の鼻唄か何ぞで、ぶらゝ遊び出すんですがね、あの上田は天性あの通りの好漢、そ